

平成30年度

日本文化特別演習 報告書



第8号

平成30年度

日本文化特別演習 報告書

第8号



月桂冠旧本社（大正8年築）前にて

北海学園大学人文学部

第2日 2月26日
[団体研修]

伏見巡見



御香宮神社



大西先生に挨拶



冷泉家住宅



神社の門の蛙股



商店街へ向かう



銀座発祥の説明



寺田屋前にて



寺田屋(復元)



銀座の碑



紅梅と酒蔵を背景に



月桂冠へ



わき水を味見



月桂冠内部散策



閘門を散策



前列左が添乗員の内山さん



宇治川へと



しばし光合成?!



この日の気温18度!



記念写真



三栖閘門で集合写真

第3～5日

2月27日～3月1日

[グループ研修]



建仁寺の大双龍図



中村藤吉本店のわらび餅



京都刀剣御朱印巡



桂離宮の石畳



北野天満宮所蔵鬼切丸



二条城前 夕方



二条城付近の沈みゆく太陽



六孫王神社にて



伏見稲荷大社



龍安寺の石庭



「擁州路」の精進料理



鳳凰堂と十円玉



あぶり餅



太陽の塔



京都国際マンガミュージアム・火の鳥オブジェ



八坂神社の龍馬・中岡像



嵐山 竹林の道



神戸酒心館



岩神館遺跡



嵐山 竹林の道



宇治上神社

第6日 3月2日

研究成果発表会



グループ3



グループ6



グループ9



熱心な発表



グループ1



グループ2



グループ4



グループ5



グループ7



グループ8



発表会のようす

目 次

平成30年度 日本文化特別演習 報告

	引率教員	須田	一弘	徳永	良次		1
京都周辺の水辺を歩く				浅妻	佑軌		3
文化史から見た京都				安達	彩乃		5
都と都の中継点、宇治				伊藤	光来		7
日本人の「心のよりどころ」を巡って				神田	舞雪		9
“伝えたい”旅				高橋	かえで		11
日本酒とその歴史				竹内	智樹		13
歴史の力を肌で感じる京都				田辺	佳太		15
足利義輝の旧蹟を訪ねる				谷	遼亮		17
京都に残る幕末の史跡				出来田	恭		19
漫画・アニメから知る文化				中村	智樹		21
研修旅行報告				堀江	智大		23
関西の芸術との邂逅—京都・大阪を巡って—				圓子	楓太		25
「食」を巡る京都旅				室谷	奈央		27
関西を目、舌、全身で感じる				渡邊	和生		29
日本文化を歩く				渡邊	由梨菜		31
京都の寺院と庭を巡る				早川	笙子		33
観光客の集まる京都				森岡	優奈		35
世界遺産を中心に京都の文化財に触れる				大滝	結菜		37
京の街を巡って—キツネと抹茶と竹林の道—				後藤	みむ		39
中世・近代の遺物、痕跡巡り				永倉	拓輝		41
5泊6日の京都の思い出				寶金	あみ		43
京都の商店街の考察及び大阪と京都の 百貨店比較～商業立地～				橋本	航太		45

平成30年度 日本文化特別演習 報告

引率教員 須田 一弘 徳永 良次

日本文化特別演習は、平成26年度の新カリキュラム施行に際して、英米文化学科の学生にも門戸を開きつつ、従来の日本文化演習にかわって新たに開講されたもので、今年度で5回目を迎えました。京都・奈良を中心とする関西地方での実地研修は、授業科目として開講する前の研修旅行を除き旧演習から数えても実に17回目にあたり、人文学部の年中行事としてすっかり定着した感があります。

今年度の演習は、9月から1月にかけて実施された3回の事前ガイダンス（いずれも土曜日に開講）をふまえ、2月25日（月）から3月2日（土）の5泊6日の日程でフィールドワーク（団体・自主研修）と研究成果発表を行いました。

最終履修（参加者）は、1部2部、日本文化、英米文化の多彩な学生の合計22名で、昨年よりやや増えました。このメンバーが9グループを結成して、3日間にわたる自主研修を実施しました。参加学生をグループ毎に紹介していきます。

- | | | | | |
|---|-------|-------|-------|-------|
| 1 | 浅妻 佑軌 | 堀江 智大 | | |
| 2 | 安達 彩乃 | 谷 遼亮 | 早川 笙子 | |
| 3 | 伊藤 光来 | 田辺 佳太 | 出来田 恭 | 渡邊 和生 |
| 4 | 神田 舞雪 | 高橋かえで | 室谷 奈央 | |
| 5 | 圓子 楓太 | | | |
| 6 | 竹内 智樹 | 永倉 拓輝 | | |
| 7 | 渡邊由梨菜 | 森岡 優奈 | | |
| 8 | 大滝 結菜 | 後藤 みむ | 寶金 あみ | |
| 9 | 中村 智樹 | 橋本 航太 | | |

グループ構成が単独になってしまったのは、出発直前になって都合が悪くなった学生があって、そこからグループを再編成することもできず、単独行動になってしまいましたが、頑張って研修に取り組んでくれたと思います。学生諸氏が自らを律し、行動してくれたお陰で、全期間を通じてトラブルもなく、無事に研修を終えることができました。

さて、事前ガイダンスでは、第1回目に、受講生各人が自らの研究課題を設定し、個人研修で訪問する予定の場所について参考文献などを基に事前調査を行い、レポートとして提出し、添削の上返却して自主研修の成果が高まるよう指導しました。また、京都方面を自由に駆け巡るにあたって必要な予備知識（地理的な距離感、気候、鉄道などの交通機関、食事など）を講義しました。

第2回目には、聞き取り調査の予行練習としてDVD『京都——千年の水脈たたる都』NHKスペシャル・アジア古都物語第6集（NHKエンタープライズ、2003年）を視聴し、その内容をレポートにまとめる作業を行いました。この知識は、実際の団体研修での伏見地域を巡る際に役に立ったのではないかと思います。

事前研修の最後、第3回目では、お世話になった日本旅行北海道さんから実際に添乗していただける内山さんとこれまで担当の鈴木さんから、旅行に関するガイダンスを行っていただき、その後、最終的な日程確認をグループ毎に実施して、その場で、添乗員や引率教員が質問に答える時間を設けました。

今年度の研修日程は次のとおりです。

- 第1日 移動（新千歳空港—関西空港—京都）
- 第2日 団体研修（伏見方面で、近世から現代における重層的な歴史を実地研修）
- 第3日 グループ研修①
- 第4日 同 上 ②
- 第5日 同 上 ③
- 第6日 研究成果発表・昼食・移動（伊丹空港—新千歳空港）・解散

このうち、第2日の団体研修では、晴天で最高気温18度という春爛漫な気候のなか午前9時にホテルを出発し、今出川駅（市営地下鉄今出川線）から桃山御陵前駅（近畿日本鉄道）へ移動。この時、電車の時間があつたので、京都御所、冷泉家住宅、同志社大学などを簡単に説明し、有志が冷泉家住宅の門前まで移動し、冷泉家の歴史や公家住宅の構造などを観察しました。

伏見では、同志社女子大学現代社会学部教授である大西秀之先生（ご専門は人類学・環境学）と合流し、先生のご案内で、伏見の名前の由来でもあり、豊臣秀吉ゆかりの御香宮神社を視察したのち、伏見の商業都市としての機能を物語る「伏見銀座」跡が残る大手筋商店街を歩きました。さらに龍馬通りを経て龍馬が襲撃された寺田屋（再建）に至り、しばし見学。その後、十石・三十石船水郷（桜のシーズンに備えて水を抜き河床の土砂を浚渫中）沿いを見学しつつ、伏見の酒造を紹介する月桂冠大倉記念館と黄桜の酒蔵にも立ち寄り、昼食・休憩をとりました。

昼食後、伏見みなと広場の展望スポットから宇治川を眺望し、すぐそばの三栖閘門資料館を見学し集合写真を撮りました。資料館の館員の解説によれば、三栖閘門は大正大洪水をきっかけに建設された施設であり、船の通航だけでなく治水施設（堤防）としても現在なお重要な役割を担っているとのこと。ここで、全体研修を終え、グループや個別に関心のある、伏見稲荷、宇治、京都駅方面へと別れ、中書島駅前で14時頃に研修を終了しました。

研修3日目から5日目にかけては、原則グループ単位による個別研修が行われ、その成果をふまえ、最終日にあたる第6日には、準備時間をふくめ9時から正午までの約3時間、学生諸氏による研究成果発表会が開催されました。時間の関係上、1グループ10分程度の報告に過ぎませんでしたが、事前に用意したレジュメなどを基に、いずれも充実した内容の報告が行われました。ホテルの会場で昼食をとったのち、帰途につき、新千歳空港に定刻の17時10分に到着、思い出深い旅程を終え、事故もなく解散しました。

日本文化特別演習は、「日本文化の母体である関西地方にて5泊6日の研修旅行を行い、『歩く、見る、聞く』学習を通して、日本文化についての理解を深める」ことをテーマに掲げています。学生諸氏は、それぞれが自らの問題関心と事前の課題設定にしたがい、この「歩く、見る、聞く」主体的な学びをとおして得た知見をレポートにまとめています。それぞれのレポートは、初学者ゆえの拙さも残るとはいえ、知的好奇心に満ち、「文化」の具体的な「すがた・かたち」を発見した喜びが率直に綴られています。まさに本報告書は、このような受講生各人の研鑽の成果として誇るに足るものと自負しています。人文学部の教職員・学生をはじめ、多くの皆さんにご高覧賜りますれば、幸いです。

最後になりましたが、ご多忙のなか、第2日の団体研修で講師を務めていただいた大西先生と、今回の研修旅行をコーディネートし、心を砕いたくださった日本旅行北海道札幌支店の鈴木すみれさんと添乗員として参加いただいた内山麻有さんに対し、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

京都周辺の水辺を歩く

1部日本文化学科 2年 2717103 浅妻 佑軌

はじめに

私は水辺が好きで休日は川や海で過ごすことも少なくない。私の趣味である釣りが出来るというのもその理由の1つだが、水辺に居るとリラックスできるのが一番の理由である。水辺では素晴らしい景観や多くの生物を見ることができ、その土地のことを知るのに適していると個人的には感じている。そこで、今回は京都市とその周辺の水辺を歩き、札幌や北海道との違いを体感し、その土地を知ることを目的に研修を行った。

京都到着日&団体研修後

京都に到着した後にせっかくなので軽く鴨川沿いを歩いてみた。行く前は豊平川のようなものだと思っていたのだが、見てみると川の水量や景観など全く違っており、歩いていて非常に楽しかった。また、鴨川に映る先斗町の明かりが素晴らしい景観を作り出していた。川沿いが運動場などに整備されている豊平川では見られない光景だったので感動した。団体研修の後は後に歩く琵琶湖疏水とも繋がっている水路沿いに歩いてホテルへ向かった。住宅街の中に水路が流れており、まさに京都といった感じであった。

自主研修一日目

舞鶴での目的は、北海道には無い軍港の雰囲気を感じることであった。まず向かったのが北吸地区だ。この地区には北吸トンネルや舞鶴赤レンガパークなどの舞鶴鎮守府にゆかりのある建造物が残されている。赤レンガパークでは明治時代に旧海軍舞鶴鎮守府の保管倉庫として利用されていた舞鶴赤レンガ倉庫群を見ることが出来る。私は倉庫群を見学した後、すぐ近くにある赤レンガ博物館を訪れた。この博物館で面白かったのは世界のレンガを見ることが出来たことだ。これまでレンガについて学んだことは無かったので興味深かったし、同じようにレンガで有名な江別市についても興味がわいた。また、赤レンガパーク近くには自衛隊棧橋があり、海上自衛隊の護衛艦を間近で見ることが出来る。北海道の港にも護衛艦が寄港することはあるが、一度に来るのは一隻か二隻である。だがここは基地である。多くの護衛艦が密集して停泊している様は圧巻であった。北海道では絶対に見ることの出来ない光景なのでかなり興奮してしまった。北吸地区を満喫した後、私は海へ向かった。舞鶴湾は若狭湾の南西部にあり、北海道には無いリアス式海岸が広がっている。舞鶴クレインブリッジや海岸の道路を歩くのは大変気持ちの良いもので、気分をリフレッシュすることが出来た。ただ、写真を撮っているときに野生の猿に囲まれていたのは少し怖かった。道を進みつつ海を覗いていたのだが魚の姿は確認できなかったのが残念だった。結局この日は終電まで東舞鶴を散策していた。

自主研修二日目

この日は京都周辺の生物について学ぼうということで京都水族館と琵琶湖博物館を訪れた。この京都水族館は日本初の人工海水利用型水族館であり、内陸型水族館としては日本最大級ということで今回の研修で最も楽しみにしていた場所の一つである。ここでの思い出は書くことが多すぎるため割愛するが、北海道とは全く違う魚たちが展示されており本当に楽しい時間を過ごすことが出来た。楽しすぎて三周ほどしてしまい、予定していた滞在時間を大幅に過ぎてしまったのが反省点である。その後琵琶湖博物館へ向かった。琵琶湖博物館は想像していたよりもずっと大きな博物館で見る時間が足りないほどであった。琵琶湖の生まれる過程や、人間のかかわり、生息している生物についての展示があり、私の興味に完璧に合致する博物館なので見学していてとても面白かった。展示の方法にも工夫が凝らされていて、標本やはく製を手にとって観察することの出来る「大人のディスカバリールーム」やハンズオン展示が数多くある子供向けの「ディスカバリールーム」など、多くの人が楽しめる工夫があった。またこの博物館の水族展示はかなり充実しており、最高以外の何物でもなかった。博物館を見学した後、烏丸半島周辺を散策した。

自主研修三日目

この日は琵琶湖から京都にかけて作られた琵琶湖疎水とその関連施設を散策した。琵琶湖疎水は1890年完成の第一疎水と、1912年に完成した第二疎水の総称で、琵琶湖と京都市を結ぶ水路のことだ。この琵琶湖疎水を滋賀県の大津港から京都の蹴上エリアまで歩くことで建設当時の雰囲気を感じ取りたかった。だが当日、疎水の補修工事が行われており、疎水の水がほぼ抜かれている状況だった。そのため、疎水の景色は良いとは言えなかったのが残念だった。疎水トンネルの入り口や出口には、当時の政治家、権力者や疎水建設に関わった人が疎水への思いを書き記した扁額というものが残されている。歴史に疎い私でも知っているような伊藤博文や山県有朋などの扁額もあり、琵琶湖疎水が一大事業であった事を感じ取ることが出来る。また大津閘門から蹴上の間には日本で最初のコンクリート橋や、疎水トンネルを掘るために作られた第一堅坑、南禅寺水路閣、ねじりまんぼなどを見ることができ、約一世紀前の雰囲気を味わうことが出来た。

まとめ

今回の研修では主に水辺を歩き、京都や琵琶湖の雰囲気を感じることが出来た。6日間で歩いた距離は約140キロで、かなり疲れたがとても充実したものだった。天気も三日間安定し、川、湖、海すべてに行けたのは本当に良かったと感じる。博物館や史跡を回ることによって京都周辺についてもいくらか理解を深めることが出来た。また、水辺を歩いていると生物や景観が北海道とは全く違うため、目に入ってくるもの全てが新鮮だった。そのため研修の中で多くの発見があり、自分自身の成長につながる有意義な研修旅行になった。必ずまた京都へ歩きに行こうと思う。

文化史から見た京都

1部日本文化学科 2年 2717104 安達 彩乃

私は、この5泊6日の京都研修で多くの寺院を巡った。京都は至る所に寺社仏閣が存在し、もちろん今回の研修だけでは回りきれないほどある。自主研修の3日間で11箇所の寺院を巡り、文化史と関連させて見て回る事にした。しかし、全て記す事は出来ないので、印象に残った寺院をそれぞれ述べていこうと思う。

まず、1日目は広隆寺、天龍寺、相国寺を訪れたが、その中で天龍寺、相国寺について述べる。まず、天龍寺は、南北朝文化のもので、京都五山の中の一位のお寺である。そして、夢窓疎石による曹源池という庭園が有名である。1994年に世界文化遺産に登録された。枯山水がある事で有名な龍安寺と同様に、枯山水があり、これがあるおかげで庭園全体のバランスがとれているのだらうと思い、そして、ただ池があるだけでなく、石が様々な場所に配置されている事や、庭園から亀山、小倉山、愛宕山の三つの山を眺める事が出来るので、四季の移ろいをここから楽しめるのだなと思ったので、次回は紅葉の時期に訪れたい。次に、北山文化のものである相国寺を訪れたのだが、拝観予定だった法堂が春と秋の特別公開でないと見る事が出来ず、楽しみにしていた龍の天井画はお預けとなってしまった。このまま帰るのは何だか悔しかったので、承天閣美術館へ行き、相国寺の歴史を辿ってきた。このお寺は、足利義満によって創建され、京都五山の二位である。館内には、教科書で何度も見た義満の肖像画が展示されていた。肖像画は鹿苑寺所蔵のものだそうで、相国寺は金閣と銀閣の世界文化遺産を所有する立派なお寺だったのだ。金閣と銀閣はそれぞれ単体で成立しているものだと考えていたが、相国寺所有のものだと知り、新たな知識を得る事が出来た。

2日目は、銀閣寺、南禅寺、建仁寺、六波羅蜜寺を訪れた。その中で、銀閣寺、南禅寺、建仁寺について述べる。銀閣寺は東山文化のもので、足利義政が建立したお寺である。訪れるのは二回目なのだが、今回はあいにくの雨で天候には恵まれなかった。しかし、それでも銀閣寺は禅の精神の特徴が表れていた上に、穏やかな様相を呈していたが存在感があり、雨の日に来てみるのも観光客も少ないので良いものだったと思った。印象的だったのは、義政が愛用したお茶の井庭園である。水で有名な京都ならではの庭園だと思い、現在もお茶会等の飲料水として使用されているようだ。次に南禅寺へ行った。ここは京都五山の別格とされていて、臨済宗南禅寺派の大本山であり、北山文化のものである。法堂内の天井には、龍が描かれていた。ここは常に拝観可能なので、やっと見る事が出来た。また、南禅院という場所の手前にある赤レンガのローマ水道橋に似た水路閣というものを見た。これは琵琶湖疎水事業の一環として施行されたものであり、西欧の技術が導入されて間もない当時において、日本人のみの手で設計、施行されたものであるので、非常に貴重な史跡とされている。この頃には雨が止み、曇り空の中、建仁寺へと向かった。建仁寺は京都五

山の三位のお寺で、北山文化のものだ。京都で最古の禅寺だそうで、栄西禅師が開いたとされている。ここの法堂でも天井に龍が描かれていたが、これまでに見てきた龍の中で、一番派手で迫力があつた。京都五山のお寺は全て禅宗のお寺で、それぞれの法堂の天井には仏法を守護する存在として龍が描かれている。そして、水を司る神として僧たちに仏法の雨を降らせるとともに、建物を火災から護るという意味も込められているのだ。天井の龍の有無で禅寺かどうかを判断する事が出来るのだと思った。

3日目は西本願寺、東寺、東福寺、平等院を訪れた。その中で平等院について述べる。平等院は国風文化のもので、関白である藤原頼通によって父の藤原道長の別荘を寺院に改めて創建された。そして、阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂が鳳凰堂の事を指しているのだ。広大な敷地の中に、鳳凰堂が横に長く建てられ、屋根には対になっている鳳凰が小さいながらも輝いているのを見ると、当時の頼通が描いた極楽浄土はこのようなものだったのだなと、現世にいる私たちでも体感する事が出来て不思議な気持ちになった。また、鳳翔館という博物館には雲中供養菩薩像26軀が展示されていた。その中には楽器を持っている菩薩像がいて、仏像にしては珍しく豪華に思えた。そして、その楽器は雅楽に用いられるようなものが多く、雲に乗っているという構造も含めて大陸的な要素があると感じた。

今回の研修のまとめとしては、3日間の自主研修で計画通りの寺院を巡る事が出来たので満足だった。しかし、リサーチ不足が露呈した部分もあつたので、もっと綿密な計画を立てていれば良かったと反省した。多くの仏像を見てきたが、定朝の作品が多いと感じたので、定朝はどのような人物だったのかを調べてみようと思った。また、時代は異なっているが、同じ名称の仏像がいくつも存在している事にも驚いた。特に、薬師如来像が多く、時代で製作されていた。これは、どの時代の人々も薬師如来が病氣平癒の仏様だと信じていて、信仰の対象がずっと変化せずにいたからなのだろうと思った。さらに、当時は現代のように病氣などは簡単に治るものではなかった為、多くの人々がこの薬師如来像に救いを求めていたのだろうと考えた。京都は、昔の時代に思いを馳せる事が出来て、日本の歴史を辿るにはとても良い場所だと改めて感じた。

自主研修はグループを決めていたものの各々行く場所が異なっていたので、一人で行動する事が多々あつたのだが、たまには一人で様々な場所を歩くのも楽しいものだった。京都はバスが沢山走っていて、至る所にバス停があつた。本数も多い上に、経由する場所も重複しているので、目的地に向かう際にあまり乗り換えが必要にならずに済んだのでスムーズだった。しかし、何度京都を訪れても慣れないのは、道の狭さである。路地を何度か歩く機会があつたのだが、歩道と道路を隔てる縁石が無く、ただ白い線が引かれているだけだったので、後ろから車やバイク、自転車が出来ていないかどうかを何回も確認しながら歩いた。北海道に帰るとそのような道はほとんど無いので、安心感があつた。京都に来た際は、くれぐれも交通事故にだけは遭わないようにしてもらいたい。

都と都の中継点、宇治

1部日本文化学科 2年 2717108 伊藤 光来

今回私は宇治に行った研修1日目について報告する。

まずJR宇治駅から歩いて3分くらいのところにある。お茶の点てかたを無料で体験できるお店に行った。宇治といえば抹茶と思う人が大半であるだろう。私は初めてそこでお茶を点てた。茶筌を使って縦に点てていくのだが、この動きを早くするのがとても難しく、茶筌を茶碗の底につけないで立てるのが、安定するところがないので難しくなっている要因と感じた。小さい泡がたくさんできたら完成で、飲んでみるとクリーミーに仕上がっていて、苦いかなと思っていたが、飲みやすく美味しかった。この体験が無料で予約なしのできるので宇治こまちはおすすめのお土産屋である。中村藤吉本店で昼食をとった。私は抹茶きつねうどんを食べた。麺が抹茶の緑色でうどんだが細い麺でほぼ蕎麦と見分けがつかない感じの見た目であった。お茶の味はあまり感じなかったが、甘いものではないので仕方ないかという感じを受けた。やはり抹茶は甘いものとの相性抜群である。

次に人力車に乗って宇治川の川辺から宇治上神社に行った。まず人力車に私は人生で初めて乗った。人間が引いているものなのになぜあそまでのスピードが出るのか、速さは意外であったし驚きであった。しかも宇治上神社は山の中にあるので坂をどんどん上っていったのでなおさら驚いた。人力車に乗っているときはたくさん話を聞いた。宇治は奈良時代の平城京と平安時代の平安京の間地点にある町で、都と都を行き来する人の休息の地として栄えた。宇治で1泊して平安京、平城京に向かうのが、定番だった。その過程で宇治の抹茶も栄えたといえるのではないかと思う。ほかにも宇治という地名は当て字で、もともとは兎道と書いてうじという地名だったという話も聞いた。兎の道と書いてうじと呼んでいた。神の使いのうさぎが守り神をこの地に案内したことから兎の道でうじと呼ばれるようになった。また宇治上神社には兎道稚郎子が祭られていてこれももともとうじと呼んでいた由来といえる。宇治上神社はユネスコの世界文化遺産に「古都京都の文化財」の1つとして登録されている日本最古の神社建築で本殿は平安時代後期、拝殿は鎌倉時代前期からあるものでその時代から全く変わらず、同じ場所にあることから文化遺産に登録された。下には宇治神社がありそれとの区別のために宇治上神社となった。この宇治上神社が人力車の終点だったのだがここまでの道で宇治川のところで写真を撮ったり川を眺めたりした。宇治川の流れはとても速くて魚も泳げないくらいの速さであるようだ。また宇治川は昔から氾濫しやすい川として有名でたくさんの被害を及ぼしていた。今回私たちが訪れたときも川、橋の工事作業を行っていた。そこだけは橋と一緒に写真を撮りたかったのだが残念なところであった。宇治上神社の後は源氏物語ミュージアムに行つて、私たちはここで中を見てから平等院鳳凰堂に行く予定だったのだが、館内の方が「平等院行くならもう行かないと閉館時間的にゆっくり見れないよ」と教えていただいてしかも行き方まで全

部教えていただいて、ほんとに親切にさせていただいてとても助かったのが思い出。

最後に平等院鳳凰堂にいった。ここもユネスコの世界文化遺産に「古都京都の文化財」で登録されている。ここについてまず鳳凰の形に本当になっていることに感動した。全体の写真を撮った後、鳳翔館のミュージアムに入った。ここは撮影禁止であったが、国宝が何個もあり、すごく写真撮りたかった。中でも平安時代からの大日如来仏手は大きくてこの状態で平安時代から残っていることを考えるとすごいなと感動した。鳳翔館を見た後はこれだけはやっておきたいということで10円玉と鳳凰堂と一緒に写真に撮った。鳳凰堂の全体を入れようとすると相当下がって取らなければならなくて多くの観光客がいるときはうまく取れなくて大変であった。私たちは最後閉館ギリギリまで写真を撮って回っていたので何とか全部を入れてとることができた。また池に映る鳳凰堂は天気がいいとほんとにきれいに映っていてこれも感動した。また帰り駅に向かっていく道にもたくさんの抹茶のお店が並んでおり、ここには抹茶ラーメンに抹茶餃子などどこまで抹茶にできるのだというくらい抹茶の物がたくさんあって驚いた。私は鳳凰堂のキーホルダーが欲しいなと思っていたのだが、そのあたりには抹茶のお店ばかりでお土産店って感じのところは全然なくて残念だった。しかし平等院は歴史を感じることができるものがたくさんあり、その当時を考える不思議な体験ができた。

今回のこの研修で京都が歩んできた歴史的な面や世界遺産をめぐり、その当時のことを考えながら散策でき、また抹茶を飲んだり、人力車に乗ったりと文化的な体験もできた。ちょうど3週間ほど前に人文学特別講義の文化遺産研究を受けていたので世界遺産をめぐってみたいと思っていたところでのこの研修で宇治の二つをめぐることができて世界遺産になっている要因を感じ取ることができた。京都は水がいいから伏見の月桂冠のお酒や、宇治の抹茶など美味しい飲み物ができるのだらうと6日間で感じた。今回のこの研修には、ホテルの方や、バスの運転手の方、などたくさんの方々の助けがあつてこそ私たちがこのような貴重な体験をすることができた。今回のこの研修に関わっていただいた方々に感謝の気持ちを忘れずにこれからも学んでいきたいと思った。

日本人の「心のよりどころ」を巡って

1部日本文化学科 2年 2717126 神田 舞雪

私の今回の研修の目的は、日本人が古くから心のよりどころとしてきて、今もなお守られ続けている社寺や建造物を実際に訪れ、その場に自分が身を置いたとき何を感じ、何を考えるかを確かめることであった。千年以上もの歴史がある古都京都には数多くの社寺や建造物があるが、今回はその中でも、世界文化遺産や国宝としてその価値が高く評価されている社寺や建造物、さらに私は自然が豊かな場所が好きなことから、自然豊かな場所にある社寺や建造物を巡った。5泊6日のこの研修で様々な場所を訪れたが、今回はその中でも特に印象深かった自主研修1日目と3日目のことを述べたいと思う。

自主研修1日目は班員二人と共に、嵐山にある天龍寺と野宮神社に訪れた。

阪急嵐山駅をおりて北西方向に少し歩くと、有名な渡月橋があり、そこからは雄大な桂川とその横にそびえる嵐山の美しい景観を眺めることができた。この日は平日だったにもかかわらず、嵐山は多くの観光客でにぎわっており、多くの場所が人で埋め尽くされているという印象だった。天龍寺のすぐ向かいにある湯葉料理のお店で湯葉のあんかけ丼セットを食べた後、天龍寺を訪れた。天龍寺はその庭園が世界文化遺産に登録されており、私たちは今回建物の中には入らず庭園のみを参拝した。後方に嵐山を臨むことができる曹源池はとても美しく、心を打たれた。この時期の庭園は多くの植物にまだ彩りがなくものさみしかったが、椿や梅などの花はすでに咲いており美しかった。望京の丘という丘の上からは、庭園内だけでなく嵐山の町並みも眺めることができとても良い展望であった。庭園の北側には竹林がそびえており、北門から庭園を出たあとは竹林の道を歩いた。竹がそびえた林の中はとても幻想的な空間であった。

その後は野宮神社を訪れた。野宮は昔、斎宮が伊勢へ行く前に身を清めた場所で、源氏物語の舞台ともなっている神社である。クヌギの木の皮を剥かないまま使用した黒木鳥居とよばれる鳥居がとても特徴的であった。また、この神社は豊かな自然に囲まれた場所であり、境内にそびえていたとても大きな木が印象的であった。

自主研修3日目は一日一人行動で、三十三間堂と鞍馬山、貴船神社に訪れた。

国宝である三十三間堂は、日本唯一の千体観音堂であり私が今回の研修で最も訪れたかった場所である。長いお堂は約120メートルの長さがあり、正面の柱間が33あることから、「三十三間堂」と通称されている。堂内には、中央の巨像と左右の各500体の等身立像の合計1001体の観音像がまつられており、1001体はすべてご本尊である。観音像は正しくは「十一面千手千眼観世音」といい、頭上に11の顔があり40種の手を持つ。1001体の観音像が並んでいる様子はとても神秘的でその姿を見たときは思わず息をのんだ。観音像の前列には両端に国宝風神・雷神像が、その間に国宝観音二十八部衆像のうち中尊の四方に位置する4体を除いたものが並んでおり、雨風をつかさどり「五穀豊穰」をもたらす神々として信仰

された風神と雷神の像は迫力がありよく印象に残っている。二十八部衆は千手観音とその信者を守るというインド起源のことが多い神々で、どれも個性的なキャラクターで見て楽しかった。私はこの堂の像たちにあまりに惹きつけられてしまい、一周では見足りずに堂内を二周もしてしまい、予定では30分程度滞在するつもりだったところを結局一時間半も滞在してしまった。

三十三間堂を後にし、七条駅から京阪電鉄に乗り出町柳駅で叡山電鉄に乗り換え、正午すぎ鞍馬駅に着き、鞍馬寺仁王門のすぐ手前にある「雍州路」というお店で2100円の精進料理を食べた。鞍馬の僧も食べたという伝統の精進料理は、とろろやごま豆腐、生麩や野菜の漬物などにご飯とみそ汁がついており、健康的で味もとてもおいしかった。昼食を済ませ、仁王門をいう大きな門をくぐって鞍馬山巡りを開始した。序盤に訪れた由岐神社は、鞍馬一帯の氏神様であり、境内には樹齢約800年の御神木があり神秘的であった。その後しばらく登ると、鞍馬寺の中心道場であり、千手観音、毘沙門天、護法魔王尊からなる鞍馬山尊天がまつられている本殿金堂に辿り着いた。金堂の中には入ることができず尊天の姿は拝めなかったが、そこからはお寺や山々の良い景色を眺めることができ、英気を養うことができた。金堂を後にして少し歩くと、與謝野晶子・寛歌碑があり、歌を読んでしみじみとした気持ちになった。その後は木の根道とよばれる木の根が張り巡らされた場所を歩いた。鞍馬山では今年の台風の影響で倒木が多いことが印象的であった。そしてしばらく歩いて西門から下山した。

下山後は、水の神様として信仰されている貴船神社に訪れた。貴船神社には本宮と奥宮があり、本宮、奥宮の順に訪れた。私は趣味で川を泳いだりカヌーしたりと水辺で遊ぶことが多いので、この神社を訪れ今後も水辺で安全に遊ぶことができるようお祈りした。奥宮は本宮からかなり離れた場所にあり、人でにぎわっていた本宮とは対照的に人が少なく、あたりを森に囲まれ閑散としたとても神秘的な場所だった。奥宮では昔、貞明天皇がここに訪れた際目にして感激を受けた「連理の杉」とよばれる楓と杉が合体した樹木を見ることができた。また、貴船神社は、千年以上もの昔宮廷の女流歌人である和泉式部が夫の心変わりに悩み、復縁を祈願しに参拝したところ夫と復縁できたことから、「恋を祈る神社」としても知られている。今回奥宮に訪れた際、恋の祈りをしていたかどうかは定かではないが、一人の女性が参拝後涙を流してその場を後にしていた姿が非常に印象的であった。

この研修で日本人が「心のよりどころ」としてきた多くの社寺や建造物を巡り、そこでは仏像の美しさに感激したり、自然の豊かさに心安らいだりしたりしたが、今回何より大きな発見は、そういった場所に身を置いた際、自分が無意識のうちに無心になっていたということだ。古都の文化財を巡りその場を流れる長い年月に思いをはせることで、私は忙しい日常を忘れ、悠久の時間の中に身を置いているような不思議な感覚を味わうことができた。これは口では説明が難しいが、自分にとって貴重で大切な時間であったと感じる。この研修を通して、私はすっかり古都の文化財巡りの虜になってしまったので、京都の地にはまた何度も訪れることになりそうだ。

“伝えたい” 旅

1部日本文化学科 2年 2717151 高橋 かえで

今回の日本文化演習での京都訪問は私にとって3度目の京都となった。7年前の家族旅行、3年前の修学旅行に次ぐ3度目だ。過去のいずれも京都滞在は2日程度でその2日にいわゆる観光地をすべて詰め込みたくさん移動、とにかく写真を撮りお土産を大量購入といった慌ただしい旅。それでも京都は楽しかったと言えたし二条城はすごいとか抹茶はおいしいとかちりめん細工が可愛いだとか感想はいくらでもある。だがそんな薄っぺらな感想は今思えばなんだか寂しい。当時の精一杯だっただろうがもう一度、自分にしか伝えられない京都を感じたい。時間もお金もたくさんある。一人行動だってできる。そこで「“伝えたい” 旅」をこの研修の私のテーマとした。

一つ目の“伝えたい” ポイントは研修2日目に訪れた伏見稲荷大社である。千本鳥居で有名な伏見稲荷大社は1300年以上前から続くお稲荷さん。今回私たちは山頂の一の峰上社を目指し、「お山めぐり」に挑戦した。登り進めるにつれて観光客は少なくなる。途中で案内板を見てはまだ半分も進んでないの？と驚かされ挫けそうになる。だが急に開けた場所から見える景色に感動し、また登り続ける。坂道だったり石段だったりひたすら続くなかなか足腰が鍛えられそうな道で若いうちに來ておいて良かったなんて思ってしまった。山頂に近づくにつれ、真新しそうな鳥居が増えた。公園のベンチに貼ってあるような「塗りたて注意」の張り紙があるものを見てみると「平成31年2月吉日」と記されている。本当に新しいものが増えているのだと当たり前のことを思った。山頂にたどり着いたのは一時間と少し歩いた頃だった。と言っても店の壁に「山頂 店に確認は不要」なんて張り紙があることで山頂だとわかるが正直な感想は「え、ここが？」勝手に想像していたのはきれいな景色の見えるところだったので拍子抜けしてしまった。ただ山頂なことに間違いはないようなのでご挨拶をして下山。下りは楽勝だろうと考えていたが人間坂道は下りのほうがきついうで慣れない体の使いかたに想像以上に苦しめられた。下りは鳥居の裏側を見て歩くが、今年に入ってから建てられたものが何基もあつたり、国外の方の奉納や北海道の文字もありよく見ると面白い。奉納されたものが連なってあの景観が作られているのは何か感慨深いものがある。山の空気やきれいな景色、圧倒される鮮やかな赤い鳥居の並び、登り切ったことでの達成感。実際に行ってみないとわからない本当の伏見稲荷大社である。ちなみにインスタ映えを狙うなら二の峰あたりがおすすめ。人もまばらになり、道は石段で勾配もきつめなので画面に鳥居が並んでいる様子もわかりやすい。これから訪れる予定のある方はぜひ。

二つめの「伝えたい」は桂離宮である。桂離宮は江戸時代初期に八条宮初代智仁親王によって宮家の別荘として建てられたもので回遊式庭園と純日本風の建築物で構成された壮大なものである。400年間、火災にも合わず当時の姿を今に伝えていて、今は皇室用財産と

して宮内庁が管理しており事前予約と昨年からは参観料1000円を支払えば誰でも参観することができる。私がこの研修で最も楽しみにしていた場所がここ桂離宮で自主研修の計画の際も真っ先に提案しすぐに事前予約をしたほどだ。桂離宮に興味を持ったのは一年次に履修した人文地理学Ⅰの授業内でフィールドワーク課題としてNHKの「桂離宮～知られざる月の都～」という番組を見たことがきっかけである。桂離宮という名前を聞いたことがある程度の知識しかなかった私はその美しい景観に魅了されぜひいつか訪れたいと思っていた。阪急の桂駅から歩いて20分ほど、住宅理の中に急に現れるその空間は入る前から別格の空気が流れているようだった。受付を済ませ10人ずつのグループに分かれガイドさんに連れられ参観がスタート。説明を受けながら庭を進んでいく。撮影は自由であったが説明も聞きたいし景色も見たい、写真も撮りたい、と忙しい。それぞれの茶屋や書院からの景色はどれも違うもので、池の様子も見える建物も、また植物もすべて違うのである。隠したり見せたり、気づくと高い場所にいたりさっき見たはずの景色がまた別のものに見えたりと本当に飽きない。桂離宮の最大の魅力がこの「道を進むごとに景色が変化する」ことである。私が一番感動したのは入ってまっすぐ目の前に立つ「衝立の松」そこから見えるはずの池をわざと松で隠し、後からのお楽しみ、としているのである。隠すことも芸術のひとつということだ。次の茶屋に向かう道は人の背丈ほどの木が並んで景色はまだ見えない。ほかにも書院の「月見台」は月を見る専用調整されて作られ、となりの月波楼は池に映った月を楽しむための建物である。本当にどこをとっても突き詰められ、目的がはっきり決められた素晴らしい別荘なのである。本当に文字だけでは説明できないがとにかく美しく壮大で息をのみ、少しでも長くこの場にいたいと思っただけで1時間程度の散策ではとてもじゃないが足りやしない。また何度でも訪れたいと思うし春夏秋冬すべての時期の庭園を見たい、朝見ても夜見てもまた違った風景を見せてくれるんだろうなと思うと居ても立っても居られなくなる。修学旅行で訪れたりできる人はなかなかいないだろうけど、桂離宮に一度も言ったことがない人は確実に人生損をしていると言っていると思える場所であった。

中学校の社会の教科書に景観を守るため街並みに合わせて作られたローソンの写真が掲載されていた。なんだかかっこいいしすごいなと当時は思った程度だったが実際京都に来てみると街並みは本当に景観に合わせて落ち着いた色合いや決められた高さ、明るさに揃えられていてとても美しい。観光地の最寄りの駅は装飾がされていて、嵐電の嵐山の駅や伏見稲荷駅は駅だけでわくわくするようなラッピングがなされていた。昔から観光地として多くの観光客を迎え入れてきた京都ならではの工夫や雰囲気を感じることができた。

今回京都で1週間研修をしてきたことは「伝えたい」と思うことばかりで結局このようなレポートでも全く足りない。いつか言葉を整理して多くの人に魅力を伝えられたらと切に思う。

日本酒とその歴史

1 部日本文化学科 2年 2717154 竹内 智樹

今回の研修旅行において、自分のテーマとして「日本酒についてより詳しく知る」というものがあつた。日本酒がどのような形で地域の文化として根付いているのか、発展していった要因は何なのか等を知識として知るだけでなく、実際にその土地を訪れ肌で感じる事が目的だった。

団体研修の際に訪れた月桂冠大倉記念館、キザクラカッパカントリーでは酒造りに使われていた道具や文献が展示されていた。月桂冠では、そこで造られた酒の試飲をすることもできた。その際に日本酒だけでなく、ワインも出されワインも製造していることに驚いた。キザクラカッパカントリーでは、名前にあるカッパの世界中に伝わる伝承や、今まで放送されてきたCMを見ることができた。CMにもカッパが登場しており、キザクラカッパカントリーにおいてカッパは象徴であると感じた。

自主研修では、伏見と神戸を周った。この二地域はどちらも日本酒が有名な地域で、日本酒を知るにはうってつけなためである。

伏見は、坂本龍馬が暗殺された寺田屋や、伏見稲荷大社、先述した月桂冠大倉記念館やキザクラカッパカントリー等、観光地としても人気の地域である。伏見の酒は、硬度の低い水を使い、長い期間発酵させることでなめらかな甘口の酒となり、女酒と呼ばれてきた。伏見を歩いて感じたのは、食べ物にも酒が含まれているということだった。酒造りの途中でとれる酒粕を使うのだが、それがラーメンやカレーに当たり前のように入っていた。終には、アイスやバウムクーヘンにも使われていた。酒が盛んというだけあり、食事に酒は事欠かなかった。利き酒も至る所で体験できた。京都の様々な酒蔵で造られた日本酒の違いを楽しむことができた。中でも、伏見酒造小路という複数の飲食店からなる施設では、17種類もの京都の地酒の利き酒ができ、グラスが並んでいる光景は圧巻だった。酒蔵を伏見に移し、旧館を記念館として改装したキンシ正宗堀野記念館にも訪れた。そこでは、ビール工場として改装され、残った一部の当時の酒蔵や客人をもてなすための座敷、過去に使われていた広告ポスターの他、酒造りに使われていた井戸水、残っている一部の文献を見ることができた。酒がどのような過程を経て作られているかをビデオで確認することもできた。実際に歩き回って、伏見の酒の特徴や歴史を少しでも体感できた有意義な時間であった。

神戸は灘五郷という地域が有名な酒処である。灘の酒は伏見と違い、ミネラル分を多く含んだ硬水を使い、比較的短い期間で発酵させるため酸味が強い辛口の酒となり、対称的に男酒と呼ばれてきた。神戸では、酒心館という酒蔵を訪れ、工場の中を見学することができた。実際に稼働している所は見られなかったが、どの機械がどのように使われるのか、日本酒を造る上でこだわっているところなど、日本酒の製造工程を知ることができた。特

に日本酒造りにおいて最も重要である麴を米に振りかけるという作業には、並々ならぬこだわりを感じた。工場を見学した後は、利き酒を体験できた。精米歩合の数値が低いものから高いものへと段階を踏んで飲んだため、それぞれの違いがはっきりと分かった。中でも、酒質を安定させるために加熱殺菌を行う火入れの工程を行わない生酒というものは、火入れを行った酒とは全く違い、一つの工程があるかないかでここまでの違いが出るのかと驚いた。他にも、大吟醸酒を作る際原酒と酒粕に分ける上槽という作業において、通常は機械を使用するのだが大吟醸の場合は、酒粕を袋に吊るして自然の重みで原酒と酒粕に分ける。それでとれるのは機械よりも少量だが、その分上質な酒を生み出すことができる。このように日本酒の種類によって製造工程が違うことも知ることができた。神戸を回る日に体調を崩してしまい、本来周ろうとしていた場所をほとんど訪れることが出来なかったことが心残りであるとともに、反省するべき点である。

伏見や神戸を周って日本酒という文化が様々な形で深く根付いているということが分かった。日本酒が好きでそれをテーマにするという単純な考えだったが、想像していた以上にたくさんのことを得ることが出来た。これまでより一層日本酒に対する関心が深まった。さらに日本酒だけでなく、その土地の歴史や他の文化についても関心がわいた。関連するものについても知ること、より日本酒について見聞を広めていきたいと思う。実際に現地を訪れて、元々知識として知っていたことだけでなく、新たな発見が見つかることが、とても楽しかった。知っていたことはより深く学べて、知らなかったことは新たな関心に繋がる。ただ本を読んでいるだけでは知らずに終わることをたくさん経験できた。それは反対に、新たな発見をするためには行動しなければならないということでもある。リスクを恐れて行動せずにいれば何も得ることはできない。冒険する気持ちが必要なのである。今回の研修で、より新たな発見をしていきたいと考えるようになった。現状で満足するのではなく、次の発見を求め関心を持っていく。そうすることで新たな発見に繋がるだろう。そうして見聞を広めることで自らの人生を豊かにすることに繋がる。それをこの研修で学ぶことができた。今回は体調不良と事前準備の不足により、満足に周ることができなかったのが機会を作ってもう一度訪れたいと思う。次は事前準備も体調も整えて臨みたい。

歴史の力を肌で感じる京都

1 部日本文化学科 2年 2717160 田辺 佳太

今回の日本文化特別演習では、日本の中でも観光地、歴史ある重要な都市として有名な京都という地を実際に訪れ、歴史の力を肌で感じることによって自分を高めようと考え、5泊6日の旅を決行した。1日目の到着日も含めると実際に回ったのは5日間になる。私は、前日まで大阪にいたので現地合流という形であったが、難なく合流できた。私たちのグループはもともと気心の知れた者同士だったため、多くの写真を撮りととても充実したものとなった。

1日目は、少しばかり自由時間があつたためホテル周辺と北野天満宮、四条河原町周辺を回った。まず、西陣織会館に行き伝統工芸士による手織りの実演や制作過程、実際の伝統工芸品を見て京都を代表する織物の学びを深めた。晴明神社では、陰陽師として有名な安倍晴明をまつた場所であり、いかにも京都らしいと感じた。境内には御神木の樹齢300年の楠があり実際に触れることで自然のにおいと力を感じ取ることができた。北野天満宮ではなんともタイミングよく梅花祭がやっていて北海道にはない屋台と境内では梅苑が公開されお茶を飲みながら満開の梅を楽しむという贅沢なひとときを過ごした。私は写真を撮ることが楽しくてすごく心がすっきりとした。その状態で四条河原町にある某高級イタリアンを食べ、ホテルに戻り次の日に備えた。

2日目は、団体研修で伏見周辺を回り研修後には伏見稲荷大社、祇園に行った。団体研修で覚えているのはお酒のことばかりである。日本酒の造り方を学び、名水からなる京都のお酒を堪能できたのはすごくよかった。伏見稲荷大社では、雀を食べてからしっかりと山頂まで千本鳥居を抜け登った。千本鳥居はとてもきれいで写真映えもして心と体を癒やすことができた。山頂に着いたとき「ここが山頂ですか？と聞かないでください。」という張り紙がお店にあつてユーモアにあふれているなどと思った。なぜかは行けばわかることだろう。山登りで疲労しきった私たちはその後祇園に行くもとくになにもしないで夜ご飯を済ませ、ホテルで酒盛りをすることになった。京都の水で作られたお酒はおいしくてつい飲み過ぎた結果、3日目は学園生で最も遅い時間にホテルを出発することとなった。

宇治方面で抹茶を味わい歴史を感じることがテーマだったはずの3日目は昼から中村藤吉本店でパフェを堪能した。無料で抹茶体験ができるところでは一瞬で家でもやりたいとなり道具を買ってしまった。これで札幌にいても京都を感じることができる。そして宇治上神社に行くため、予定していなかった人力車に乗ることとなり、ガイド付きだったためとても充実した時間を過ごした。まつられている天皇の歴史も勉強することができて人力車に乗ってよかったとみんなで感じていた。宇治上神社から平等院鳳凰堂にいき10円玉と写真を撮ったり鳳翔館という博物館で歴史を学んだりした。水面に映る平等院はとても美しく心を奪われた。夜ご飯には少し高めのすき焼きを食べ次の日に備えた。

4日目は一人行動をして大覚寺、嵐山付近、清水寺に行った。学んだことは心を静かにして平静を保ち常になにかを考えることである。決して一人で旅をしたからと言うわけでもなく、初めて写経体験をしたり、世界救済教の聖地をたまたま訪れたり、竹林で1人でたくさんの写真をとることなどを通して、自分について深く考える機会が多くあったためであると信じている。歴史ある京都のまちには何かしらそういう力があるのではないかと自分の身をもって体感した。パワースポットだけでなく普通の町並みにも良さを感じることもある。やはり、京都の歴史はすごいと感じた1日であった。1人で夜ご飯も済ませお土産も大量に買いいい一日を過ごしたという実感がとてもある。

5日目は一番行きたかった鞍馬山にいった。源義経が幼少期に牛若丸と呼ばれていた頃に鞍馬山に残され、大天狗に出会い修行をうけたという伝説がある山である。京都にあるパワースポットの中でも一番の力があるとされているところである。すごく天気がよく登山中にも気温が上がり気持ちのいい森林浴をして、身体にパワーがとてつもなくみなぎっていた。力が自分の中に入ってくる感覚はすごく初めての体験だった。実際に訪れないと一生わかることのないものであったと感じた。下山してからはくらま温泉にも行き今回の旅の疲れを一気にリフレッシュした。鞍馬山に感謝をして今回の旅を終えた。

今回の旅では、京都の多大なる歴史の力を感じとてもとても成長した気がする旅となった。この力をいかして今後も頑張っていきたい。

足利義輝の旧蹟を訪ねる

1部日本文化学科 2年 2717161 谷 遼亮

室町幕府十三代征夷大將軍、足利義輝は劍豪として名を馳せ、永祿の変での最期の逸話から人気も高い。私も義輝の最期が大好きである。日本文化特別演習で京都を訪れたのは、義輝の旧蹟を巡る良い機会であると考えた。ついでにその弟の十五代將軍足利義昭に関わる旧蹟も巡る。早い話が聖地巡礼である。文字数の関係上序文はこの辺で締め括らせて戴く。

一日目(2/27)は左京・東山に散在する足利義輝に関する城趾を散策した。当初の予定では四箇所を訪れる筈だったが、雑な事前計画により結局は二箇所のみとなってしまった。

左京区浄土寺にある中尾城は、足利義輝の父である先代將軍足利義晴が築城したもので、天文十九(1550)年に三好家臣の三好長逸に攻められ落城した。銀閣寺の裏手から大文字山の登山ルートに入り、少し歩くと砂防ダムがありそこから分岐する道を登ると城趾に辿り着く。ちなみに大文字焼きは足利將軍家の家臣の末裔が執り行っているという。話を戻す。周辺の事前調査を怠った結果、登山ルートがわからなかったため、目的地点まで直線に斜面を登った。登頂すると木に「中尾城本丸跡」とあるのみであったが、遺構の保存状況がかなり良好で、堀切や土塁が一目見てわかった。少し見て帰るつもりだったが、思いの外居心地が良く30分程散策を続けた。大文字山から如意ヶ嶽への登山ルートを進むと如意ヶ嶽城に辿り着くが、山頂付近が公有地で立入禁止となっており、北白川まで戻った。

北白川の瓜生山には將軍山城があり、本丸跡には幸龍大権現という社が立つ。將軍山城も中尾城と同じく足利義晴が築城したもので、天文十六(1547)年に足利義輝も父とともにここで三好長慶の軍を迎え撃ったが敗れ、落城した。中尾城に比べて遺構は確認しづらかったものの、それでも堀切などが確認できた。その後北白川から南下し、清水寺付近の靈山城へと向かったが、進入経路が墓所であったため敬遠してしまい、疲労も蓄積していたため一日目のフィールドワークはこれを以て終了した。

二日目(2/28)は、京を追われることが多かった足利義輝が退避した先の滋賀を中心に巡った。

比叡山坂本駅から比叡山側に登ると日吉大社に着く。ここは足利義輝が元服を行った地である。元服後は「義藤」と名乗った。「義輝」と名を改めるのは後述の朽木に滞在している頃からである。

その後比叡山坂本駅から安曇川駅まで移動し、そこからバスで朽木へと向かった。朽木は足利義輝が五年ほど滞在しており、関わりの深い地である。靈山城を三好家臣の今村慶満によって攻め落とされた義輝は、そこから現在の国道367号線にあたる道を通って朽木に落ち延びたという。在地の武家である朽木家は幕臣となっており、当時の当主であった朽木元綱が義輝を保護した。なお、足利義晴もまた五年ほど朽木に退避していたことがあるという。朽木での目的地は朽木資料館で、ここは事前予約が必要であり、高島市教委の方

に開けて頂いた。話を聞いていて岩神館遺跡というものを知り、連れて行ってもらった。この岩神館遺跡は、義晴が朽木に退避していた頃に朽木植綱が義晴の為に建てた館であるという。義輝もまた朽木での居館としていたが、京へ帰還した後に取り壊された。しかし、庭園だけは残され今に伝わる。この庭園には足利義輝が腰掛けたという石もあった。現在岩神館の跡地には朽木家の菩提寺である興聖寺が立つ。

安曇川駅から京都駅まで戻り、そこから乗り換えて宇治駅で降り、槇島城へと向かった。この槇島城は元亀四(1573)年に足利義昭が籠城し、織田信長によって攻め落とされた。現在は小さな公園となっており、遺構は確認できない。ただ、碑の横の解説看板に縄張り図が掲載されており、どうやら宇治川を濠として利用していたことが窺える。二日目はこれを以て終了した。

三日目(3/1)は主に寺院を巡ることになったが、前日のようなめばしい収穫はなかった。

まず蹴上駅で降りて南禅寺に向かった。足利義輝は天文五年(1536年)にここで生まれている。寺内のどの寺院で生まれたかまでは分からなかった。

蹴上駅から一駅の御陵駅で北側の坂道を登ると本圀寺に着く。足利義昭は織田信長の支援のもと畿内に入り、一時的に本圀寺を拠点としていた。この本圀寺を三好家臣の三好三人衆(三好長逸・三好政康・岩成友通)らが襲撃した。明智光秀らがこれを防ぎ、後に幕臣の細川藤孝や織田家からの援軍が到着し三好家を撤退させた。この事件を本圀寺の変という。

御陵駅から丸太町駅まで戻り、京都御苑内にある旧二条城の石垣を見に行った。この石垣は京都御苑の榎木口付近にあり、足利義昭の時代の二条城の石垣を復元したものであるという。地下鉄の工事の際に出土したものの一部で、まだ大部分が地下に埋没しているという。旧二条城は後述の武衛陣の跡地に建てられたものであり、織田信長の支援のもとで築城された。資材や嗜好品が先述の本圀寺から多く調達されたという。この二条城は後に義昭と信長が対立した際に攻められ、籠城していた幕臣の伊勢貞興らが降伏して破却された。

榎木口からほど近いところに足利義輝の邸跡がある。現在は碑が立つのみで遺構は確認できない。この邸を中心に武衛陣と呼ばれる二条城の前身が構築されていたが、永禄の変で義輝が殺害された際に廃され、邸も焼かれたという。

ホテルからすぐ近くに相国寺があり、寺内の寺院に光源院がある。元は広徳軒という名前だったが、足利義輝の死後に足利義昭によって義輝の菩提とされ、その際に義輝の戒名「光源院融山道圓」から光源院と改称したとされる。義輝の肖像が所蔵されており、拝見したいと思ったが人が居らず断念した。聖地巡礼は以上を以て完了した。

さて、今回の演習で学んだことは、フィールドワークを通して歴史上の人物の事績を追うことの楽しさである。城址や館跡などの史跡が特に印象深かった。なにより、昔から好きだった人物の旧蹟を巡って知的好奇心が満たされた。他にも寄り道した史跡など、書ききれなかったこともまだ沢山あるが、その全てが目新しく、大変有意義な演習であったと感じる。京都にはまた個人的に行きたいと考えているので、そのときは他の人物を題材とした聖地巡礼を行うのもいいかもしれない。

京都に残る幕末の史跡

1部日本文化学科 2年 2717168 出来田 恭

私が日本文化特別演習で個人研修のテーマにしたことは、「幕末ゆかりの地」である。幕末における京都は、当時江戸幕府が存在した江戸と同じ、もしくはそれ以上に重要な場所であり、多くの史跡が点在している。その理由として考えられるのは、当時朝廷が京都に置かれており、尊王攘夷派・公武合体派問わず多くの様々な藩が滞在・行動をしていたからである。本レポートでは「京都お散歩マップ」（2016 実業之日本社）や「歩く地図 京都散歩2018」（2017 成美堂出版）を参考にして得た情報をもとに私が京都で足を運んだ幕末ゆかりの地で学んだことを報告する。

研修の2日目、全体で伏見へ行った後に私が向かったのは東山区にある京都霊山護国神社である。ここは坂本龍馬や桂小五郎をはじめとした幕末の志士たちの墓が建てられており、神社の下にある通りは多くの土産売り場が並んでいて、観光客であふれている。霊山護国神社で最も大々的に取り上げられているのは坂本龍馬と中岡慎太郎の墓であり、この2人に関しては墓の隣に二人が並んでいる像が建てられている。この像に掘られた碑文には、坂本龍馬と後藤象二郎が考案した「八策」が後の「五箇条の御誓文」に反映されており、明治時代の基礎は坂本龍馬によって成立したと書かれている。また、この像や碑文と、構成や内容が同じでサイズが大きいものが八坂神社の円山公園にある。

ここからは研修全体の5日目、個人研修の3日目に私が単独で向かった史跡についての報告をしていく。この日私が最初に向かったのは、薩長同盟が締結された地であるとされる小松帯刀寓居跡、及び御花畑御屋敷跡である。ここは京都市営地下鉄の鞍馬口駅を出て徒歩3分程度のところにあり、現在はカフェとして営業している。カフェの前には「薩長同盟 ゆかりの地」と掘られた石碑が立っており、その隣には説明が書かれた案内板が建てられていた。説明によると、この御花畑御屋敷にて坂本龍馬・小松帯刀・西郷隆盛・桂小五郎らが会見し、徳川家による長州征討への対応について話し合い、薩摩・長州の合意が成されたという。また、御花畑御屋敷の位置は長らく不明であり、2008年に堀川通り一条東入ルの近衛屋敷跡であると判断されたが、2016年には鹿児島県歴史資料センター黎明館、及び京都府立総合資料館所蔵絵図によって現在の場所であると判明したようである。

私が次に向かったのは二条城である。二条城は1603年に徳川幕府が宿泊所として造営したものであり、また15代将軍徳川慶喜が大政奉還を決意した場所でもあることから「徳川幕府の始まりと終わりの地」とあるといえる。二条城の名前は、中心に位置する「本丸」とその周囲を囲むように建設されている「二の丸」の構造から由来していると推測できるが、その構造は敵から攻め入られたときに有利に働くように機能していたといわれている。私が二条城で最も感動した設備は「二の丸御殿」である。二の丸御殿とは、その名の通り二条城において「二の丸」に位置しており、将軍が家臣たちを集めて話し合う際や客人を

招く際などに使用された設備であり、徳川慶喜が大政奉還について話し合ったのも二の丸御殿であったといわれている。この設備で注目すべきポイントは、襖に描かれている日本画である。二の丸御殿の襖絵は日本史の教科書にも登場する狩野派によって描かれたものであり、各部屋には虎・松・鷹などが綺麗に描かれている。虎には将軍の守護や客人への威嚇などの意味があり、二の丸御殿の中でも客人と謁見する部屋の襖に描かれている。また、鷹が描かれている理由としては徳川家康が大の鷹好きであったことからであるとされている。拝観可能である二の丸御殿に設置されている襖絵は模写されたものであり、本物の展示室は二条城の順路の終盤に設置されているが、私が拝観したときは閉館中であった。他にも本丸の庭園が工事中であったことなど色々とタイミングも悪く、これに関しては事前調査不足であった。

次に向かった場所は、二条城から南西へ徒歩25分程度のところにある壬生寺、そして新撰組駐屯所「八木邸」である。壬生は新撰組が結成した地であり、現存している新撰組駐屯所は八木邸と前川邸の2つであるという。私が先に向かったのは壬生寺である。壬生寺は新撰組の兵法調練場として使用されていたが、その一方で沖田総司が子どもたちと遊んだり、近藤勇らが壬生狂言を鑑賞するような場でもあったようだ。また、拝観料を支払えば史料館には入ることもでき、そこには立派な近藤勇像が建てられている。八木邸は新撰組の屯所の中で最初に使用された建物であり、拝観料1000円を支払うことでガイド付きで中に入ることができて、最後においしいお茶と茶菓子をいただくことができる。中では新撰組結成から鳥羽・伏見の戦いまでの新撰組の逸話や活躍の話を20分ほどガイドの方から聞くことができる。八木邸は新撰組の初代局長である芹沢鴨が近藤一派によって暗殺された地であり、当時から残っている刀傷を見せてもらうことができる。

壬生からバスに乗り15分ほどで京都市役所前に着き、次に向かった場所は長州藩邸跡、及び桂小五郎像である。現在ではオークラホテルという宿泊施設になっているが入口近くに桂小五郎像、そして河原町通り沿いに長州藩邸跡の石碑と案内板がある。説明によると1864年、蛤御門の変で朝廷、幕府に敗れた長州藩は藩邸に火を放ち、京都から去って行ったといわれている。

最後に訪問したのは岬神社である。木屋町通りを河原町に向かって歩いて行く途中土佐藩邸跡の石碑があり、そこを右に曲がると狭い路地の右側に小さな神社がある。岬神社は土佐稲荷とも呼ばれ室町時代初期から地域土着の神として信仰を集め、江戸時代においては土佐藩廷内に一般人が自由にお参りするための通路を確保したほどであったといわれている。中には小さな坂本龍馬像が建てられており、龍馬が土佐稲荷と同様に人々から人気であることがわかる。

以上が今回の研修で学んだことである。まとめると、幕末の志士たちの像が数多く建てられていることから、彼らが人々にどれほど尊敬されていたかがわかった。まだ訪問していない幕末ゆかりの地は他にもあるので、機会があればまた京都に訪れたいと思う。

漫画・アニメから知る文化

1部日本文化学科 2年 2717176 中村 智樹

私は、この特別演習にて、京都が舞台となったアニメや、京都市内にある日本の漫画に関連した場所や施設を巡り、世界的にも評価される日本の漫画・アニメの文化から日本のサブカルチャー文化を研究することを目的として、この演習を受講した。実際の演習での行程は、当初の事前学習で考えた予定から変更した部分も多々あったが、それ故に当初の目的以上に様々な場所を巡ることが出来たと考えられる。

・研修2日目—四条、寺町、木屋町、—

演習の2日目は、受講者全員で伏見方面を巡る行程であったが、それが終了した後は、各自解散となったので、予定にはなかったが、急遽四条、木屋町並びに夷川発電所方面に向かうことにした。この周辺は、森見登美彦原作のアニメ『四畳半神話大系』の登場人物たちが実際に訪れている場所であったために、私はアニメ内での登場シーンと、実際の景観を比べることで、どのようなアニメの表現で街を映しているかを、実際に見て回って調べてみた。

・自主研修1日目(研修3日目)—太秦映画村、京大周辺(夷川発電所など)—

自主研修の1日目は、当初考えていた予定を大きく変更し、太秦方面にある東映太秦映画村まで向かった。この施設は、時代劇、特撮作品『仮面ライダー』シリーズ、アニメ『ワンピース』等を手掛けた東映が、撮影所の一部をテーマパーク化したものである。この施設では、時代劇風のセットやアトラクションが主だった特徴となっているが、一部には前述のアニメ、特撮に関連した展示や、映画に関する資料館などもあり、そこでは私の本演習のテーマともつながる「アニメ関連の歴史」だけではなく、我々日本人が日頃何気なく接している「映画」とは何か、その起源は何かについて考えさせられた部分が多分にあったように感じられた。その後は、先述の『四畳半神話大系』並びに同作者・スタッフのアニメ映画『夜は短し歩けよ乙女』の舞台となった京都大学の周辺や、近くの飲食店などを巡った。この日と、その前日の四条などの散策で実際に分かったことは、一種の作劇的なオーバーな表現についてのことである。作中にて「京都駅並びに京都タワーの見える飲食店で飲んでいて主人公が、そのまま木屋町通りの飲み屋を引きずり回され、最終的に夷川発電所に放置される」という展開がある。作中人物のように、京都駅周辺から、その夷川発電所までを、私も実際に歩いてみたが、軽く1時間以上はかかる上に、相当な体力を使ったと感じる。つまり、普通の状態の人間でもその状態であれば、泥酔した状態でその行程をこなすのが困難であるという可能性も見えるということである。一見愚にもつかない、ありふれた結論のようではあるが、それはアニメ(文章であれば小説も)において、このようにオーバーな表現(現代的に言えば「話を盛る」ということか)を用いることは、視聴者(読み手)に対して、作劇的な感情移入がもたらされ易くなるということの発見につながったと

考えられる

・自主研修2日目(研修4日目)―京都国際マンガミュージアム、下鴨方面―

2日目は、地下鉄烏丸線の烏丸御池駅近くにある、京都国際マンガミュージアムに向かい、日本、特に戦後の日本の漫画の発展が如何なるものであったかを考えることを目的として、そこを訪れた。実際に漫画を立ち読み(ないし不通に座って読むこと)が出来るようなブースや、「国際」の名に恥じぬような各国の言語で翻訳された漫画などもあったが、何より迫力のある展示は、戦後(1945年)から現代にかけての漫画がズラリと並んだ棚であった。文字通り、その時期の漫画が(全集や復刻版なども含まれるものの)実際に手に取って読めるような形式になっており、正に戦後から現代にかけての漫画を調べる上では重要な場所であると言える。実際にそれらの漫画を読み、私には「戦後漫画の基本的構造」を造り上げた手塚治虫は勿論、後進の漫画家たちによる「各個の」功績も、現代の漫画・アニメ文化において決して欠かすことの出来ない重要なものであったという認識を持つことが出来た。続いて訪れた下鴨方面は、先述の京都のアニメ2作品にて、重要な役割を果たしていた場所であり、そこでも、前2日のような比較を引き続き行うことが出来た。

・自主研修3日目(研修5日目)―宝塚、池田、梅田―

3日目は、大阪方面まで向かい、戦後の漫画界で「巨匠」「神」とまで称された漫画家、手塚治虫のゆかりの地へ向かい、彼の創作の原点について調べることをした。最初に向かったのは、宝塚市の宝塚大劇場と、宝塚文化創造館である。本来であれば、その周辺には手塚治虫記念館もあったが、改装工事中のために訪問は叶わなかった。この宝塚文化創造館は、かつての宝塚音楽学校の校舎であり、2階のすみれミュージアムには、宝塚の歴史を学ぶことが出来、更に実際の宝塚の演劇の音楽、照明、衣装などの構造が分かるようになっており、幼き日の手塚治虫が「本物」と呼んだ宝塚歌劇の様子的一端についても知れた。続く池田では、手塚治虫の幼少期の面影の残る池田町・池田文庫に向かい、その書籍なども調べることで、手塚の幼少期の即席なども知ることが出来た。最後の目的地である梅田では、手塚が終戦をそこで喜んだといわれる阪急百貨店で、実際に移築されたシャンデリアや、『ブラックジャック』の一部でも描かれた外装なども見て回り、手塚の足跡を少しは辿ることが出来たと思える。

・まとめ

かつて手塚治虫は、まだ学生だった頃の後一流漫画家らが実家に訪問した時に、彼らにこう告げたという「本物の映画を見て、本物の音楽を聴くようにしなさい」。それは、この研修で、私が経験したこともそうであると言えるのではないだろうか。アニメの中の表象は、それはあくまでフィクションであるが、それを実際に体験することは、何よりもその文化や知見を広めることにおいて重要である。そして、手塚から「本物」を教わった漫画家たちは、後に功績を残し、彼らもまた「本物」となったが、私はその「本物」を体験し、その素晴らしいさを実感できた。今後も、この素晴らしい経験を活かし、更なる知見が広められるよう、私も精進していきたい。

研修旅行報告

1部日本文化学科 2年 2717188 堀江 智大

はじめに

今回の関西研修旅行は、2019年3月現在の私にとって大変貴重な経験となった。元々道外への旅行に対する興味は薄かったが、「大学生になったなら、もう少し遠出してみよう」と両親に釘を刺されていたことを思い出し、日本文化特別演習の受講を決めた。何より京都は高校における修学旅行で一度訪れた場所であるため、これならあまり気負うことなく参加できると感じたのも大きい。

そのようにして研修旅行に参加した私だが、修学旅行の時とはひと味、ふた味違う京都を見て回ることが出来た。まずは私が巡った中で、特に印象深かった場所について述べる。

訪問先紹介

1. 美術館「えき」KYOTO

一つ目は、自主研修一日目に訪れた美術館「えき」KYOTO（以下「えき」）である。ジェイアール京都伊勢丹に存在するこの美術館では、所謂常設展示が存在しない。一定期間ごとに美術館全体を使った企画展が行われる。企画展のジャンルは様々だが、今回「えき」を訪れた際に行われていたのは、「『長くつ下のピッピ』の世界展（2019年2月8日（金）～3月4日（月）開催）」である。天衣無縫で怪力無双な、しかし根は友達思いで優しい女の子の物語。それが『長くつ下のピッピ』である。

作者のアストリッド・リンドグレーンは、スウェーデンの児童文学作家であり、また同国における親子法の改正に貢献した人物でもある。今回の企画展では『長くつ下のピッピ』以外のリンドグレーン作品や、彼女自身についても知ることが出来る。初めて企画展の内容を見た際は「児童文学はあまり…」と正直気が引けたものだが、いざ覗けばそのような考えは吹き飛んでしまう。

かつて触れた、または触れたかも知れないものにもう一度触れる機会を得る。『長くつ下のピッピ』の世界展は、そういった一つの経験を与えてくれたのである。

2. 京都国際マンガミュージアム

二つ目は、京都国際マンガミュージアムである。地下鉄烏丸御池付近に存在する、文字通り「漫画の博物館」だ。館内を通して、年代や言語を問わず様々な漫画が棚に並ぶ。実際に棚から取り出し読むことが出来るため、気になるものがあれば一度手にとってみると良いだろう。ただし、大抵のものならば全巻揃っているが、作品によっては1～3巻までで途切れてしまっているものもあるため注意すべし。もし目当ての漫画が無ければ、毎週火・日曜日に利用できる研究閲覧室に頼るのも良いだろう。

また、ここでは紙芝居口演やワークショップ、マンガ工房といったコーナーが多数存在しており、飽きることはそうそう無い。中でもメイン展示「マンガって何?」では、漫画の歴史や産業といった、様々な側面について知ることが出来る。漫画の裏事情を知りたい方は

必見だ。

私にとって漫画は今でも馴染み深いものであるが、そのように身近にあるものほど知らないことばかり、といったパターンは多い。京都国際マンガミュージアムは、そんな身近なものについて改めて知る・考える機会をくれる場所であった。

3. 京都文化博物館

最後に紹介するのは、京都文化博物館である。ここでは4階から3階にかけて特別展「北野天満宮 信仰と名宝 ―天神さんの源流― (2019年2月23日(土)～4月14日(日)開催)」が行われていた。天満大自在天神として奉られる菅原道真をはじめとして、北野天満宮における信仰世界を見ることが出来る。本展では音声ガイド(550円で貸出)が導入されており、様々なアニメ・ゲーム等で活動中の声優・花江夏樹氏によるナビゲーションを展示と共に楽しむことが出来た。音声ガイドを利用することで、対応している展示品についてある程度かみ砕いた説明を聞くことが出来る。展示品に添えられた解説文と併せて聞けば、間違いなく理解の助けとなるだろう。ただし、全ての展示品に対応しているとは限らないので、その点には注意すべし。

近年において、様々な声優・俳優を起用した音声ガイドが様々な展覧会で導入されている。その展覧会はどのような層をターゲットにしているのか。起用された役者からある程度分析することが出来るかも知れない。今回の特別展では、企画展に参加する際の一つの視点を得た。

全体を通して

博物館施設を中心に京都の様々な場所を巡り、大いに研修を楽しむことが出来た。事前レポートの際に定めた目標である「京都の博物館を訪れること」、「京都を楽しむこと」は達成できたと言える。しかし、それと同時に大きな反省点もあった。

「(できる限り)歩いて巡る」を個人のテーマとし臨んだ今回の研修旅行であるが、私は行動を共にした浅妻君や谷君と初日から25キロメートルもの距離を歩き、両足が筋肉痛になってしまった。痛みは最終日にまで及び、自主研修の行程にも影響を与えてしまうこととなった。

公共交通機関を利用し、無理の無い範囲での散策に切り替えることは出来たものの、行程をねじ曲げる結果となったのは残念である。今後旅行する機会があれば、より自分の体に対して気を遣う必要があるだろう。

計画通りに事を進める際は決して無理をしてはならないというのが、私が今回の研修で得た一番の教訓である。

関西の芸術との邂逅 —京都・大阪を巡って—

1部日本文化学科 2年 2717192 圓子 楓太

私は今回、「京都、大阪の芸術・文化に触れる」をテーマに研修を行った。しかし、このテーマには2つの具体的な目的がある。1つ目は修学旅行で行けなかった場所に行くということだ。私は高校の修学旅行で京都に行った。だが、その時はあまり京都を観光することができずに終わってしまった。だから今回の研修では高校の時の修学旅行で行けなかった場所に行き、より京都を知ろうという目的があった。2つ目は大阪の太陽の塔の見学である。私は岡本太郎がとても好きで前々から太陽の塔を見たいと思っていたので、この研修で見に行くことに決めた。3ヶ月前から自主研修最終日である3月1日に太陽の塔内部公開の予約を申し込み、この研修で一番の楽しみにしていた。このことについてはまた後で述べることにする。

2月26日、団体行動の日であったが、14時で解散して宇治に近いということもあって、自主研修1日目に行こうとしていた宇治の平等院鳳凰堂に行くことにした。平等院には平等院ミュージアムという博物館があるが、そこには注意書きで「館内での写真撮影ならびにスケッチはお断り致します。」と書いてあり、博物館内での写真撮影禁止はよく見るのだが、スケッチも禁止なのは初めて見て徹底していると感じた。

また、平等院鳳凰堂と10円玉のツーショットを撮ろうとしている観光客がいたので私も真似してみたが、10円玉にピントを合わせると平等院鳳凰堂がぼやけ、平等院鳳凰堂にピントを合わせると10円玉がぼやけてしまいうまく撮影することができないことを知った。

2月27日、自主研修1日目は前日に行こうと思っていた平等院鳳凰堂に行くことができたので、予定を変更して京都水族館へ見学に行った。この京都水族館は魚の展示の構成がちゃんと観客が楽しめるように考えられていると感じた。入り口から入るとまず京の川というエリアがあり、1メートルを超えるオオサンショウウオが観客を出迎える。ここで京都に生息している水の生き物を知ることができる。次のエリアではオットセイやアザラシがおり、観客を楽しませる。その次は京の海（うみの洞窟）というエリアで巨大な水槽を悠々自適に泳ぐ京都の海の魚たちを見ることができる。またこの空間は音響も工夫されており、まるで自分が海の底にいるような感覚に浸り、リラックスすることができる。京の海の次には、さんご礁のいきものやくらげのエリアなど日本ではなかなか見ることができないより非現実的なエリアが広がる。そして次にはイルカスタジアムがあり、そこではイルカショーが1日に2度開催される。私はそこでイルカショーを見学したのだが、とてもよく作り込まれていた。まずイルカショーがストーリー仕立てになっているのだ。物語になっているイルカショーなど初めて見たのでとても楽しむことができた（ちなみにストーリーとしては世界各地を周るサーカス集団が京都水族館にやって来て、イルカと仲良くなるという

話だ)。またイルカショーの中には一般的なジャンプ以外にも合唱というものもあって斬新で初めての経験となった。そして最後には京の里山のエリアがある。このエリアは実際の京都の里山を再現していてとても落ち着く空間となっている。こうして最初京の川から始まりまた京の里山と戻ってくるような構成になっている。水族館という機能で京都らしさを十分に表していように思えた。

2月28日、自主研修2日目、午前中は銀閣寺を訪れた。この日は生憎の雨天だったが、銀閣寺の前にある池に雨が降り注ぎ、水面に浮かぶ水紋にはとても感慨深いものがあつた。また、銀閣寺に入ってからすぐの所にある銀沙灘と向月台が足跡をつけずにどうやって作られているのかとても興味深く調べてみたが、足袋のようなものを履きながら木の板で作っているようであつた。

午後は嵐山に向かった。嵐山へ行くには桂駅で乗り換えて3駅ほど乗り嵐山駅が終点であり、それほど嵐山へ行く人が多いことを思い知らされた。嵐山にはトロッコがあることを知り、乗ろうと思いトロッコ嵯峨駅まで歩いたがトロッコは12月から2月末日まで運休で、3月1日（明日）から運行ということがわかり、事前準備の大切さを身を以て実感した。

3月1日、自主研修3日目は大阪に太陽の塔を見に行つた。前述した通り太陽の塔の見学に当たって、完全予約制の太陽の塔の内部公開を予約しておき、予め『太陽の塔 ガイド』という本も読んでおり準備万端であつた。太陽の塔の顔には、現在を表す太陽の顔、未来を表す黄金の顔、過去を表す黒い太陽があり、それ以外のことについては見る者の想像に委ねられている。私は過去を表す黒い太陽が、闇を纏っているような残酷で恐ろしい表情をしているのに対して未来を表す黄金の顔がその昏い過去を照らしているように思えてとても救われる気持ちになる。

太陽の塔内部は赤い光に照らされていた。内部展示は「いのち」がテーマになっていたもので、この赤い光は生き物の血液や肉を表しているのだろうかと思いを巡らせた。中央には全長41メートルの生命の樹が立っており、下から順に原生生物→三葉虫→恐竜→猿人類→クロマニヨン人と生物の過程が表現されている。外国人の観客も多かった大阪万博、これなら言葉の違う人々の心も揺さぶることができるだろう。

太陽の塔の内部は両腕の部分まで上ることが可能であり、左腕には非常階段がついており、右腕には現在は何もないが当時はエスカレーターがあつた。腕の部分は青紫色のような光で照らされていて、普段日常では見ることができない不思議な感情を抱いた。

今回の研修で一番学んだことは、札幌での生活では決して見ることはできない過去の世界を見ることができたことだろう。平等院鳳凰堂、銀閣寺、嵐山、そして太陽の塔。太陽の塔は私にとって最も衝撃を与えた。あのような芸術作品が1970年、私が生まれる約30年前に創造されていたことを実際に見て知ることができた。過去の世界の広さを知り、未来への展望を抱いた素晴らしい経験となった研修であつた。

「食」を巡る京都旅

1 部日本文化学科 2年 2717200 室谷 奈央

私の演習テーマは「食」を巡る京都旅である。元々は別のテーマを設定していたが、実際に京都へ行き美味しい料理の数々に魅了された。まず、京都の「食」に興味を持ったきっかけとして、団体研修で訪れた「鉄板串焼き 咲蔵」という店で私は衝撃的な出逢いをする。この店は、焼き鳥で有名な「鳥せい」の姉妹店である。残念ながら焼き鳥を食べることは出来なかったのだが、私はここで初めて生麩というものを食べた。生麩とは、麩のもとである湿麩を焼くのではなく茹でたものだそうだ。食感は、お餅のようにもちもちとしており生麩自体に味はついていないが田楽にして味噌と一緒に食べると絶品であった。そこで、京都には私がまだ知らないおいしい食べ物があるなら全部食べたいと思ったのがきっかけである。また、私はもともと別のテーマを設定していたが、演習中にスマホをバスに置き忘れるというトラブルで足止めを食らってしまい、予定通りの行動ができなかったこともテーマを変えた理由の一つである。京都というと、寺社仏閣に注目しがちだが食べ物だけを巡る旅もなかなか楽しいものなのでぜひともしてみしてほしい。

まず、私が訪れたのは「京・錦 おばん菜ビュッフェ ひなたや」である。錦市場内にあり、休日は行列ができると聞いて開店前から待つことにした。ここでは、野菜ソムリエ監修のもと、京都の日常的な家庭料理であるおばんざいをビュッフェ形式で好きなだけ食べることができる。現在、「おばんざい」という言葉を日常的に使うことは少ないそうだが、観光客を中心に京都の伝統的な食事として広まっている。料理は野菜を中心としたヘルシーなもので、おでんやひじき煮など馴染みのあるものから生麩の西京焼きなどといった変わり種のものまで様々だ。カフェのようなおしゃれな空間である店内は広くないが、平日ということもあり空いていて、棚にずらりと並べられたおばんざいに胸が高鳴った。さらに、京都ならではのスイーツコーナーでは、オリジナルの最中や八つ橋を楽しむことができる。錦市場には他にもおいしいご飯や食べ歩きができるような店が多く建ち並んでいたもので、京都を訪れた際には行っておきたいスポットである。

次に訪れたのは、嵐山にある「嵯峨とうふ稲」という店である。ここでは初めての湯葉を食べた。湯葉とは、豆乳を加熱する際に表面にできる皮膜のことだそうだ。豆乳の独特な風味が苦手な私だが、友人に湯葉と豆乳は別物と言われ、挑戦してみることにした。注文した「手桶くみあげ湯葉御膳」は、想像していたシート状の湯葉とは違い、薄い湯葉が重なり合った豆腐のようになっていた。調べてみると、生湯葉には「引き上げ湯葉」と「汲み上げ湯葉」の2種類があり湯葉作りの段階で温度が低い最初に出てくるのが汲み上げ湯葉だそうだ。お好みでかつお出汁かポン酢につけて食べる汲み上げ湯葉は、豆乳というより豆腐に近く豆乳が苦手な私でもおいしく食べることができた。また、御膳には他にも生麩、胡麻豆腐と甘味として本わらびがセットになっていた。胡麻豆腐は、すった胡麻を葛

粉とだし汁を練り豆腐状に冷やし固めたものである。食べるまで胡麻の入った豆腐のことだと思っており、食感も全く豆腐とは異なり食べた瞬間に胡麻の風味が口全体に行き渡り感動した。また、初めて食べる本わらびは普段食べているでんぷんの入ったものとは別格で溶けるようなおいしさに頬が落ちそうになった。

次に訪れたのは、世界文化遺産でもある龍安寺の境内にある「西源院」である。ここでは、日本庭園を眺めながら湯豆腐と精進料理を楽しむことができる。境内にあり入りづらい雰囲気や敷居が高いと思われがちだが、湯豆腐は1500円とそれほど高くはなく昼過ぎに行くと空いていて、ゆったりとした時の流れを感じることができる。見た目にも鮮やかな湯豆腐はごくシンプルな豆腐と七草が入ったもので、出汁のおいしさが体全体に染み渡る。私が訪れたときは雨が降っていたが、雨に濡れて光る日本庭園と雨の音がとても心地よかった。寺社巡りなどで歩き疲れた体を癒してくれる素晴らしい店である。

そして、私が今回の旅で最もおいしいと感じたのはあぶり餅である。あぶり餅とは、炭火であぶったきなこ風味の一口大の餅に白味噌のたれを絡め1つずつ串に刺したものである。店は今宮神社の隣に「一文字屋和助」と「かざりや」の2つが向かい合わせに建っており、「一文字屋和助」には1000年の歴史が「かざりや」にも400年の歴史がある老舗である。どちらも店頭で餅を炙っており、その香ばしい香りに誘われてしまう。調べてみると、「かざりや」は甘さが強いという情報が多かったので甘いものが好きな私は「かざりや」のあぶり餅を食べることにした。開店直後の朝10時に訪れると、朝早いにもかかわらずたくさんの観光客がいて驚いた。お店の方に声をかけると座敷に案内され、お茶を用意してくれる。風情のある京町家の座敷に座っていると、まるで江戸時代にタイムスリップしたような感覚になる。あぶり餅は、1人前でおおよそ10本くらいのあぶり餅が食べられ値段も500円と手ごろである。肌寒い朝に淹れたてのお茶と焼き立てのお餅、素朴な甘じょっぱさは癖になり、無限に食べられると思ってしまうほどである。そして、あぶり餅の串には今宮神社に奉納された斎串が使われているようだ。今宮神社は無病息災や健康長寿の神社で、斎串であぶり餅を食べるとご利益があるともされている。食べ終えて店を出るときにはお店の方が「おおきに」と声をかけてくれて身も心も温かくなるお店であった。

今回の旅では身をもって和食の素晴らしさを感じることができた。和食はユネスコの無形文化遺産にも登録されていて農林水産省では、和食の4つの特徴として(1)多様で新鮮な食材とその持ち味の尊重、(2)健康的な食生活を支える栄養バランス、(3)自然の美しさや季節の移ろいの表現、(4)正月などの年中行事との密接な関わり、を挙げている。京都で食べられている「食」にはこのすべてが当てはまっており、昔から食べる人の身も心も支えてきたのだと思うと、時代によって多少の味の変化はあっても同じものを食べているということは感慨深いことだと強く感じた。トラブルに見舞われたり、予定通りにいかないことの方が多かったが、その中で新たな出逢いがあったりと全日程を通してとても良い経験ができた。

関西を目、舌、全身で感じる

1部日本文化学科 2年 2717210 渡邊 和生

私は今回の研修で日本の古都である京都、昔も今も流行の先駆けとなる大阪を散策した。テーマにあるようにいわゆる“SNS映え”するような景色を見る、食べ物を食べる、観光地を巡ることがメインである。自主研修をする班員全員、体力に自信がある男たちであったため予定よりもアクティブな旅行となった。このレポートでは全体を通じて成果として得られたもの、逆に今後に生かす反省等交えて紹介していきたい。

2月26日

団体研修後、伏見稲荷大社を訪れた。全国に3万社ほどあると言われている稲荷神社の総本社である。日本国内でも京都へ観光にきたら行っておくべきスポットと言われるだけあって凄まじい数の観光客でごった返していた。日本人よりも外国人観光客のほうが多かったのは間違いない。本殿から上に少し歩くと“SNS映え”にうってつけな千本鳥居の入り口がある。既にここから写真を撮るために人々が立ち止まるために混雑していた。その先ずっと朱色のトンネルのようにびっしりと鳥居が建てられているため、どこで写真を撮っても変わらなかったなとその日の夜写真フォルダを見返して思った。鳥居をくぐっていくのはいいが、途中から傾斜がきつくなり登山といっても過言ではないほどだった。京都の街が一望できる中腹の「四ツ辻」にて一休みし、そこで食べたソフトクリームはとても美味しかった。ここからまた登山が再開されるが山奥に進むにつれて人の数が減ってきて、神聖な場所であることを再認識できた。観光客というよりも参拝者、というべき人が登っていくのである。

頂上は標高233m。これを上り下りしたのにも関わらず、その後夜ご飯を求め祇園へ向かう。「ぎをん常磐」というお店で鴨なんばそばを食べた。分厚い鴨肉に出汁のうま味のなかに柑橘のアクセントが効いていて一日中歩き回った体に染み渡るものだった。班の1人が旅行でカッコがつくという理由で革靴を履いてきた人がいたが、ものすごく歩くために一人街中へスニーカーを買いに行っていたのは笑わざるを得なかった。

2月27日

前日の夜、さっそく宴を開いたため予定が少々変更になった。出発時刻がお昼近くになったが宇治を目指した。私は宇治に行くのを一番楽しみにしていたので、ここではついつい財布の紐が緩んでしまった。宇治の抹茶を実際に点てて飲む経験が無料でできたり、「中村藤吉本店」にて抹茶うどんや一日数量限定のわらび餅を食べたり、味覚をフル活用した。その後、世界文化遺産である宇治上神社を訪れるために人力車に乗って観光した。人力車のお兄さんが宇治の歴史、「宇治」はもともと「卯道」であった話、伊右衛門の由来の福寿園の小話など貴重な経験ができた。もし宇治に来ることがあれば是非、人力車に乗るべきだと感じた。宇治上神社からは徒歩で平等院に向かった。あいにく鳳凰堂の内部拝観は

できなかったが鳳翔館で鳳凰一對、様々な姿の菩薩像、平安彫刻を鑑賞できたので日本文化を学べたといえる。

2月28日

この日は大阪を観光。旅行中唯一の雨が降った日で気分も少し下げ気味でスタートした。まずは服を購入したいという希望でアメリカ村へいった。近くのたこ焼き屋「甲賀流」というところで関西のたこ焼きはどんなものかと味わった。10個で450円という安さで、タコは大きく、あつあつ、とろとろなたこ焼きだった。食べるための店内スペースも用意されていて雨でも大満足だった。服を物色した後、心斎橋付近へと移動した。このころには雨も上がり、串カツを食べたいということで「串かつだるま」で昼食をとった。確かにサクサクな衣、絶妙なあまじょっぱい秘伝のタレで何本でもいける気がした。大阪の土地柄なのか、観光客だからなのか、昼間からジョッキでビールを頼んでいる姿を傍目にたくさん食べた。それから道頓堀へ行き、グリコの写真を撮りそのまま徒歩で通天閣に向かった。およそ2キロだったが“ノリ”で歩いてしまった。通天閣は写真を撮るのみで、またそこからあべのハルカスに向かって歩いた。

夕食は梅田駅にある「きじ本店」でお好み焼き、モダン焼きを食べた。着いた時点で待ち時間が発生していて私たちの後ろにも人が並ぶ人気店である。焼いてくれたものを席のテーブルで食べる形だったのであっさりと終わった。また大阪を訪れることがあれば他のたこ焼き、串カツ、お好み焼きを食べ歩きしたい。

3月1日

再び京都に戻り、貴船鞍馬方面を訪れた。まずは鞍馬寺から。鞍馬は京都最大のパワースポットと言われている。ご利益だけでなく“覚醒の気”を全身で感じられた気がする。伏見稲荷の時と同様に山奥に本堂があるため、ほぼ登山だった。傾斜がきつく舗装もされていない道もあり、朝露でぬかるんでいる箇所等、前日歩きすぎたせいで余計にきつく感じられた。頂上で参拝し貴船側に向かって歩き始めたのだが、この道が旅行中最大の難所だったといえるだろう。下り道なので楽かとおもっていたが、路面状況が登るときよりも酷く整備もきちんとはされていないため苦戦の連続だった。下山の道中でより顕著に、去年の台風の影響がみられた。大きな大木が根元からぼきと折れていたり、土砂崩れで建物が崩れ通行止めになっていたり、自然災害の恐怖を目の当たりにした。貴船神社にはほどなくして到着、参拝し、水占いをやってみた。貴船神社にある“神水”につけることでおみくじの結果が現れるというもので結果は吉だった。昼食後は体を癒すために「くらま温泉」を訪れた。ここでは露天風呂のみの日帰り温泉に入った。夕日と鞍馬山の自然を見上げながら入る温泉は気持ちよかった。

以上、団体研修後から自主研修最終日について記述したが、これでもまだまだ訪れたい場所があったなと毎日反省したものだ。団体研修～自主研修最終日まで毎日20000歩以上歩いていたのはさすがに驚いた。また北海道よりも暖かいとはいえ、夜はしっかりとした服が必要だったのでこの特別演習を受講する際には歩きやすい靴、寒暖差に対応できる服装を事前準備するのが大切なかもしれない。

日本文化を歩く

1部日本文化学科 2年 2717211 渡邊 由梨菜

はじめに

自主研修を行うにあたって私が設定したテーマは、「日本文化を歩く」である。「日本文化」は一概には言えず、範囲も広いであろう。だが、私はあえて広いテーマを選択した。テーマにとらわれず、自分が思い感じたままに行動し、日本文化を感じながら楽しみたいと思ったからである。また、私の今回の研修の目標として、「インスタ映え」も掲げていた。「インスタ映え」は、2017年のユーキャン新語・流行語大賞を受賞した言葉で、インスタグラムに投稿した際に、見栄えが良く映えるという意味である。私は、高校2年生の冬からインスタグラムを始め、こだわって投稿してきた。その模様についてもこのレポートで述べていければいいなと考える。

2月27日（水）

自主研修1日目は、自由に行動できる日であったため、朝の準備に時間をとれたので有意義な朝となった。最初に向かった先は、「河合神社」であった。河合神社は左京区の下鴨にありホテルから歩いて向かうことができた。河合神社は、手鏡の形をした絵馬に自分自身が普段使用している化粧品でお化粧をし、裏に願いを記入し、奉納する神社である。絵馬に化粧をする際は、自分のきれいな表情を描き、外見も内面も美人になれるように願いを託すことが決まりである。私は、口紅以外の化粧品を持ち歩いていなかったため、備え付けの色鉛筆でお化粧をしたが、人一倍願いを込めながら奉納することができたと思う。

昼食は、錦市場にある伯食屋肉寿司専科というところでとった。限定100食であり、毎日12時半には整理券がなくなってしまう人気店である。肉茶漬け、肉の握り、軍艦、巻き寿司がセットになっており、どれもとてもおいしかったので、お勧めしたい。

そして、私たちは清水寺に向かった。その中にある、縁結びの神様が宿り良縁を結ぶとされる自主神社は、時間をかけて参拝した。縁結びの「縁」は、人と人との出会いやつながりのことであり、「縁結び」は自分の想う人と結ばれること、ぜひ結ばれるように神様にお願いすることをいう。また、自主神社の中に、「恋占いの石」という石がある。10メートルほど離れた石と石の間を片方の石から反対側の石まで目を閉じて歩き、無事にたどり着くことができれば願いが叶うとされる願掛けの石である。歩く間に、助けを必要とすれば、自分の恋愛にも人の助けを必要とするとも言われている。私も行ってみたかったが、観光客で混みあっており、目を閉じるのは危険であったため断念せざるを得なかった。自主神社で引いた恋みくじが大吉であったので、今後に期待したい。

2月28日（木）

自主研修2日目は少し遠出をし、大阪のユニバーサルスタジオジャパンへと向かった。日本文化を歩くことはできない場所であるが、1日だけ外国の文化に触れ、日本文化との相違

点についても考えていきたいと思った。ユニバーサルスタジオジャパンは世界のテーマパーク入場者数でトップ5にランクインしており、昨年は1493.5万人動員した。私たちが行った日は、雨が降っており、人気アトラクションのフライングダイナソーも1週間の点検の日であったため多少空いている日であった。ハリウッド・ドリーム・ザ・ライドというアトラクションでdreams come trueの大阪loverという曲を聴きながら乗ることができたため、旅行の中でも特に印象に残っている曲である。夕食は大阪名物のたこ焼きと串カツを食べ、体の内側からも大阪に触れることができた

3月1日（金）

自主研修3日目は嵐山を散策した。着物を着て、渡月橋を渡り竹林を歩くことで、大自然を感じることができた。古くから伝わる着物を着ることで日本文化も感じやすくなったと思う。嵐山のインスタ映えスポットとしてお勧めしたい場所は、着物フォレストである。京友禅の生地を使ったポール600本が立ち並んでおり、着物を着ながらであるとなお、インスタ映えした。私たちは見ることはできなかったが、夜はライトアップされ幻想的な雰囲気漂うため、夜に訪れることもお勧めできる。また、一人一つの七輪が用意され目の前でお団子を焼くことができるイクスカフェという場所もインスタ映えし、人気店であるためお勧めしたい。時期も時期であったためか、寒さが一番の天敵であった。竹林は森の中にあるため体感温度もかなり下がった気がした。草履で山道を歩くため、歩きづらく、つかれやすいという点も難点であった。もし、着物で訪れる際は、防寒対策をしっかりと行い、体調も万全な状態で散策してほしい。

最後に

私は、修学旅行、友人との旅行と過去2回京都を訪れたことがあったが、これほど多くの場所をめぐり、多くのことを学べたのは初めてであった。「日本文化を歩く」といったテーマを設定したことで、各地で真剣に学び、知識として蓄えようといった姿勢が自分の中で生まれたため、成長でき、勉強になった研修であった。また、自分の意志では行かないような酒蔵や、寺にも団体研修で行かせていただいたので、新たな興味も沸いた。京都の人はバイクや車のスピードが速いといった、その場に訪れなければ知れなかったようなことも知ることができた研修でもあった。

初めは長いと感じていた5泊6日であったが、いざ行ってみるとあっという間の5泊6日でとても充実していた。ぜひまた訪れて、今回行くことができなかった場所で新たな発見ができればいいなと私は考える。

京都の寺院と庭を巡る

1 部英米文化学科 2 年 2917171 早川 笙子

今回の研修でのテーマは寺院と庭だった。個人の宗教観に関わらず日本人にとって寺は身近な存在である。その中でも特に京都は都として古くから栄え、今もお街の風景や文化として日本の歴史を色濃く残している。そこで、今でも多くの人々が訪れる寺院に行くことで歴史を視覚で感じるとともに、人々から愛される庭を見学することでその魅力を知りたいと考えた。

まず自主研修 1 日目の最初に向かったのは広隆寺である。ここでは国宝に指定されている弥勒菩薩半跏思惟像の見学を主な目的として訪れたが、平日の午前中ということもあり、参拝客は少なかった。仏像が収められている新霊宝殿に入ると中は薄暗くひんやりとして、静かで荘厳な雰囲気が感じられた。さらに部屋全体を見渡すとたくさんの仏像が並べられていて、圧倒されてしまった。一つ一つの仏像は細部まで精巧に彫られ、木造なのに生き生きと表現されていることにとても感動した。半跏思惟像は中央に置かれ、とても穏やかな顔で何かを思索していた。仏像を見ていると、当時の人々はどのような気持ちで拝んでいたのだろうかというようなことが頭に浮かんだ。次に天竜寺、清涼寺、大覚寺のある嵐山に向かった。天竜寺には夢窓疎石の策定した曹源池があり、4つの山を借景としている池泉回遊式庭園というところに夢窓疎石のこだわりが感じられた。ここで友人と別れ、1人旅が始まった。清涼寺ではまず本堂に入ると今日のご本尊の近くまで行っていいということだったので釈迦如来像を普段より少し近くから見る事ができた。他にも様々な展示があり一通り見学した後、庭に出てみることにした。人が2, 3人しかおらず私1人になったタイミングもあり静かな空間が広がっていた。庭は枯山水ということで竜安寺のような庭を想像していたのだが、そうではなく一般的な庭のように感じた。そこには簡易的な写経体験ができる部屋があったのでしてみることにした。庭にいる間は自然の音しか聞こえずとても不思議な気持ちになった。清涼寺から出て、最後に大覚寺に向かった。正式名称は旧嵯峨御所大覚寺門跡といい、嵯峨天皇や後水尾天皇などの日本史の教科書に出てくるような人々が深く関わっていることが説明され、自分がそこにいるという事実を考えると変な気持ちになった。大覚寺には百人一首に選ばれた和歌の題材にもなった名古屋の滝跡があって、本当の目的は庭園内にある滝跡を見ることだったのだが、台風の影響で木が倒れ立ち入り禁止となり残念ながら見ることはできず、また次の機会のお楽しみとなった。

2 日目はあいにくの雨となったが予定通りまず仁和寺を訪れた。徒然草にも登場する仁和寺は想像するよりとても広かった。仁王門をくぐると遠くに朱色の中門が見え、そこからまた少し歩くと金堂がある。丁度特別拝観ができ、金堂と経蔵の中に入ることができた。中には観光ガイドの方がいて、阿弥陀三尊像やその周りの仏像、仁和寺についての説明を受けた。そこで仁和寺は光孝天皇、宇多天皇2代かけて完成され、その後長い間皇族が住

職を務めてきたということを知ることができた。さらに両端には天灯鬼、竜灯鬼の像があり、普段は四天王などに踏まれている邪気が仏前を照らす役割を与えられるとその名前に変わるということなどの解説を聞くことができた。次に竜安寺へ向かった。山門を通過して方丈に着くとたくさんの日本人、外国人観光客がいて、竜安寺の石庭は国籍にかかわらず人々を引きつけるのだと感じた。石庭には以前から憧れがあり今回の研修でも楽しみの1つであったが想像していたよりも広く、とてもシンプルだと感じた。周りに人はいたが、座って庭を眺めていると心が落ち着いて穏やかな気持ちになれた気がした。方丈を出て休憩所で湯葉うどんを食べて暖まっていると雨があがっていた。そして2日目の最後は言わずと知れた金閣だ。入り口から観光客が並び、丁度中国人の団体ツアーとかぶり終始賑やかな中金閣を巡った。実物を見たときの感想は、金！というそのままの言葉しか浮かばないくらいまばゆく輝いていた。正直に言うとあまり庭の風景には溶け込んでいないと感じた。次に京都に来るときは銀閣にも行き、義満と義政の違いを比べてみたい。

3日目はまず六波羅蜜寺、三十三間堂、東福寺をはしごした。六波羅蜜寺はなんと言っても空也上人像である。念仏を称える口から飛び出す6体の阿弥陀を見ることができ感無量であった。その他にも重要文化財の仏像が多くあり、じっくり堪能した。出るときにお寺の方に「良いお参りでした」と言われてなぜか少し嬉しかった。三十三間堂は弓道をしているということもあり、ぜひ訪れてみたかった。靴を脱いで中に入るとすぐに1001体の十一面千手千眼観世音が現れた。やはり仏像が1001体も並ぶ様子は見る者を後ずさりさせるような異様な雰囲気があるが、しかし目が離せないのだ。一体一体、仏師によって微妙に違う姿や表情に、必ず自分と似ている顔の仏像がいるとも言われている。それらの前には風神雷神、二十八部衆が並びまったく飽きることなく見学を終えた。そこから東福寺で友人と合流した。方丈には東西南北に4つの庭があり、八相成道にちなんで八相の庭と称されている。同じ枯山水でも竜安寺や清涼寺とも違い、円柱の石北斗七星が表現されていたり、市松模様の敷石と苔の庭があったりと、庭でこれだけ様々な表現ができるということに驚かされた。いよいよ研修最後は平等院鳳凰堂だ。池に浮かぶ朱色の建物は藤原頼道によって創建され、極楽浄土をモデルにしていると言われている。現実の世界に極楽浄土を作ってしまうという発想はお金持ちのものかなとも思ったが、やはり豪華であったし実際に見ることができて少し感動した。

3日間多くの寺院を回ったが、まだまだ行けていない場所がたくさんあり京都の恐ろしさを実感した。庭をテーマに据えて旅をしてみると、それぞれ楽しみ方が違うということが分かった。枯山水のようなシンプルな庭園は縁側に座って心を落ち着けたり、ぼーっとしたりする楽しさ、池泉式庭園では庭を歩いて木々や花、遠くにある山などの風景を見るという楽しさがあるのではないかな。そして、それは国や性別、年齢に関係なく誰しもを魅了する理由の1つだということ。今回5泊6日で京都に滞在し、自分の立てたテーマで研修をするという貴重な経験ができて本当によかったと感じた。初めての京都だったが、これから何度も訪れてまた新しい発見をしたい。

観光客の集まる京都

1部英米文化学科 2年 2917197 森岡 優奈

私は、5泊6日の日本文化特別演習を通して、日本文化を1番感じられる京都がどうして外国人だけでなく日本人にも人気の観光地であり続けるのかをテーマに自主研修のプランを立てた。また、近年ではインスタが流行し、インスタ映えを目的とした旅行が増えてきている。人気の観光地である京都とインスタ映えとなるスポットを関連付けて5日間の研修内容を報告する。

研修1日目は、ホテルに到着した後、時間があつたためホテル近くにあった北野天満宮を訪れた。その日はちょうど、毎月25日の「天神さんの日」で縁日と境内ライトアップの日だった。私たちは、参拝をした後、縁日を少し楽しんだ。日没前に北野天満宮を後にしたため、境内のライトアップは見ることはできなかったが十分楽しむことができた。

研修2日目は、同志社大学の先生に案内してもらいながらみんなで伏見を歩いて回った。京都と水の関わりについて知ることができた。月桂冠大倉記念館では、お酒の試飲をして、初めて日本酒とワインを飲んだが、おいしさが分からずまだまだ子供だなと感じた。その後、自由行動があつたため伏見稲荷大社に行った。伏見稲荷大社は、千本鳥居を目的に来る観光客が多い。私たちも千本鳥居の前でたくさんの写真を撮った。登頂までの距離が想像以上に長く、中間地点くらいにある休憩所できな粉味のソフトクリームを食べて下山した。そして、ずっと食べてみたかった水信玄餅を食べることができた。これは、まるもち屋の水まるもちというもので、ふもとの稲荷駅近くにあるので、伏見稲荷大社へ行った際は、ぜひ立ち寄ってほしい。

研修3日目は、ホテルから歩いて河合神社に行った。河合神社は、今女性たちに人気の高い観光スポットである。なぜならこの神社は、美麗祈願で有名な神社で、「美人になりたい」、「綺麗になりたい」と願う女性たちが集まるからである。そして、美麗の祈願絵馬として鏡絵馬がインスタ映えとなるためさらに注目されている。この鏡絵馬は、なりたい顔を自分の化粧品を使って絵馬に描くもので、私も鏡絵馬を奉納してきた。お昼ご飯には、限定百食の肉寿司と肉茶漬けが食べられる「佰食屋肉寿司専科」に行った。私たちは、運よく食べることができ、初めて肉寿司を食べたが、とても美味しかった。京都へ行く際はぜひ食べてほしい。整理券を配っていて、すぐに売り切れてしまうので開店時間に行くことをお勧めする。その後、京都観光の大定番である祇園を散策した。祇園は、京都を1番感じられる街だと私は思う。そのため、周りには外国人観光客がとても多かった。清水寺へ向かう途中の二年坂などの小道では、食べ歩きをしたり、お土産を買ったりすることができる。今回私たちの目的は、清水寺ではなく清水寺境内にある地主神社だった。地主神社は世界文化遺産に登録されていて、さらに、本殿・拝殿・総門と境内地が国の重要文化財に指定されており、「恋占いの石」が縄文時代の遺物であることも確認されている。そし

て、地主神社は縁結びの神様、大国主命を主祭神とし、奇稲田姫命を正殿に祭祀されている。良縁を結ぶ神社と言われている地主神社にある片方の石から目を閉じて歩き、もう一方の石にたどり着くことができると、恋の願いが叶うとされる「願掛けの石」が女性やカップルに人気のスポットとなっている。しかし、訪れる観光客が多くこれをするのは容易ではないため私たちは断念した。清めの水で使う柄杓は「勝・恋・開運・合格・厄除・安産・安全・良縁」の8種類あり、私たちは「恋」の柄杓で手を清めた。恋みくじも引き、ここでの目的は果たせた。

研修4日目は、大阪で観光客が1番訪れると思われる、ユニバーサルスタジオジャパンへ行った。あいにくの天気だったが、そのためか客数が通常より少なく感じられ、アトラクションに多く乗ることができた。2度目のユニバーサルスタジオジャパンだったが、前回乗ることのできなかったアトラクションに乗ることができてよかった。ユニバーサルスタジオジャパンには、インスタ映えスポットがたくさんあり、思い出に残る素敵な写真をたくさん撮ることができた。一通り楽しんだ後、たこ焼きを食べ、大阪駅まで移動して串カツを食べた。どれもおいしく、また食べたいと思った。大阪には、たこ焼きやお好み焼き、串カツなど有名な美味しい食べ物がたくさんあるので観光客に人気の都市となっている。

研修5日目は、ずっと行ってみたかった嵐山を訪れた。京都には修学旅行や旅行で何度か訪れたことがあったが、祇園や京都駅から遠かったため訪れることができなかった。嵐山に到着した後、私たちは着物を着て竹林へ向かった。竹林は、自然を感じることができ、とてもリフレッシュできた。着物を着ていたため、外国人に写真を一緒にとってほしいとたくさん声をかけられた。また、嵐電嵐山駅にある「キモノ・フォレスト」を訪れた。「キモノ・フォレスト」とは、京友禅の生地をアクリルで包み、高さ約2メートルのものを京友禅の林に見立てたもので、インスタ映えスポットとして人気である。そして、お団子を炭で焼いて食べる「イクスカフェ」は、インスタ映えになるだけでなく、味もとても美味しかった。お団子には、普通のものとよもぎの2種類あり、粒あんのみたらしをつけて食べるものであった。おすすめは、よもぎに粒あんをつけ、普通のお団子にみたらしをつけて食べるのが美味しかった。嵐山では、逆さまにしても落ちない豆腐ソフトやお花が入っている華やかな足湯など、食べたいものややりたいことがまだたくさんあるのでまた訪れたいと思う。

この日本文化特別演習を通して、私は美味しいものやインスタ映えとなるスポットが多く、どの年代でもどの国の人でも楽しめる都市に観光客が多く訪れ、観光地となっていると感じた。そして今回訪れた京都のようにまた行きたいと思わせてくれることが観光地であり続ける最大の理由だと感じた。

世界遺産を中心に京都の文化財に触れる

2部日本文化学科 2年 2817108 大滝 結菜

私は京都の世界遺産や文化財に多く触れることを目的にこの演習に望んだ。京都には17か所が「古都京都の文化財」という一つの世界遺産として登録されている。最近、世界遺産検定をとったり、世界遺産についての本を読んだりしたこともあり世界遺産を中心に、長い間日本の中心であった京都ならではの文化財に多く触れたいと思った。

個人研修の前に2月26日の団体研修後、時間があつたので平等院鳳凰堂に行ったことをここに書きたいと思う。池に映る平等院を見ることができなかったが、豪華絢爛でとても美しかった。ミュージアム鳳翔館では、多くの仏像が展示されており、仏像の手に持っているものの細かさや、一つ一つの表情など違って素晴らしかった。

《2月27日（水）》

個人研修1日目はまず、健甞神社を訪れた。ここは織田信長を祀っている神社で境内には「人間50年」から始まる織田信長のうたの書かれた碑があつた。

次に、北野天満宮を訪れた。この時期はちょうど梅の時期で梅とてもきれいに咲いていた。また宝物殿の特別展示が行われていた。展示では国宝である鬼切丸を中心に10振り以上の刀剣や甲冑を見ることができた。さらにこの演習の初日である2月25日は北野天満宮に祀られている菅原道真の亡くなった日で、夜のライトアップも行われていた。夜の天満宮は昼と雰囲気異なり、人も少ないのでゆっくり見ることができた。

次に嵯峨嵐山文華館に向かった。ここは競技かるたの大会が行われていた場所で、多くの百人一首の展示があつた。百人一首をあまり知らない人にもわかりやすいように簡単な歌の説明や、百人一首の札と一緒に歌を詠んだ人物の人形などがあつた。百人一首や、北海道にあまりない競技かるたのやり方などについても知ることができて勉強になった。

その後、竹林の道という所を通り野々宮神社に向かった。竹林の道は、左右にとっても大きく長い竹がたくさん立ち並んでいて、あまり竹自体を見たことがなかったので圧巻だった。野々宮神社は縁結びの神社で、『源氏物語』にも登場した場所である。ほかの神社に比べてこぢんまりとしていたが、自然の中に溶け込んでいて落ち着く雰囲気だった。

《2月28日（木）》

個人研修2日目は初めに平安神宮を訪れた。平安神宮は、平安遷都1100年を記念して、明治28年に桓武天皇を神として祀り、その後昭和15年に孝明天皇と一緒に祀った神社である。平安神宮の「神門」である應天門だけでもすごい迫力だが、そこをぬけると太極殿が見えて、神聖な雰囲気であつた。その後清水寺にも少し行つたが、雨と時間などの関係で、坂を登るだけで終わってしまった。

次に養源院に向かった。ここは、そして、有名な「血天井」がある。「血天井」は、伏見城の鳥居元忠が自害した場所の床を、供養のために養源院の天井に張ったものである。

ほかには俵屋宗達や狩野派の迫力のある絵もあった。養源院ではガイドの人がついてくれて、壁画など一つずつ説明をしてくれた。「血天井」についてもガイドの人が、「ここが鳥居元忠の頭、まげ、腕、足」などを教えてくれた。天井を見れば、本当にはっきり残っており人の形だと分かった。一番はっきり残っていたのは自害した家臣の手で、指の一本一本がはっきり残っており、思わず息をのんだ。

次に豊国神社を訪れた。ここは豊臣秀吉を祀っている神社で、正面の唐門は伏見城の遺構であると伝えられており、国宝三唐門の一つとされている。次の場所の都合など時間があまりなく、また今度ゆっくりと見に行きたいと思った。

最後に京都国立博物館を訪れた。ここでは特別展示で天皇の即位図などの公開がされていた。この即位図は、5月の新天皇即位のこともあり始めて公開されたものだそうだ。昔の即位の様子がはっきりとわかる絵であった。ほかにも書状など天皇関係のものが多く展示されていたし、ほかにも刀の装飾部の展示や仏像など多くの展示物があった。

《3月1日（金）》

3日目は初めに、二条城を訪れた。二条城は徳川家康が上洛の時の宿として作り、江戸幕府15代徳川慶喜が大政奉還の意志を発表した場所でもある。多くの門や建物が文化財などに登録されており、世界遺産にも登録されている。北野天満宮程ではないが梅も咲いており、ほかに松、竹もあり縁起がいいと感じた。

次に京都御所に向かった。御所は最近まで簡単に入ることができなかったが、無料で入ることができるようになった。しかし、入るときは持ち物検査があり、警備の人が多く立っていた。建物はとても立派で、一部建物の中や壁画も見ることができてすごかった。

次に壬生屯所旧跡の八木邸を訪れた。ここは新選組の最初の屯所だった場所である。ここではガイドの人が新選組の成り立ちや、内情について説明をしてくれて、最後にはお茶とお菓子もついていた。八木邸では、ここで殺された芹沢鴨がつまづいた勉強机や、そのときにできた刀キズも見ることができた。ほとんど当時のまま残っているらしく、ここで新選組ができ、約二年間生活してきたのだと思うと感動した。

私は、世界遺産を中心に回ることを目的にしていたが結局行けたのは、平等院、清水寺、二条城だけであった。また個人研修の3日間で一か所は世界遺産をまわるという目標をつくった。しかし本来は個人研修1日目に、天龍寺に行く予定であったが時間の関係で行けなくなり、この目標を達成することができなかった。ほかにも時間の関係でゆっくり見ることができなかった場所もあるので、残りの世界遺産と一緒にまた見に行きたいと思った。

そして札幌では見られない多くの重要文化財などを見ることができ勉強になったし、どれもきれいに残っていて、これからも失われないで残り続けてほしいと思った。また養源院や八木邸でガイドがあり、このように語り継いでくれる人のありがたさも感じた。

京の街を巡って —キツネと抹茶と竹林の道—

2部日本文化学科 2年 2817118 後藤 みむ

日本文化特別演習に参加した目的は、高校時代に訪れることができなかった場所に赴きたいと考えたからである。高校時代に修学旅行で京都に訪れたが、その際は嵐山でしか自由行動ができなかったため、京都の他の名所も散策したいと考えた。その目的を持ちながら、6日間の京都での研修に参加し、特に感動した場所を時系列にそって紹介する。

まず、研修2日目に平等院を訪れた。平等院に行きたかった理由は水面に反射する鳳凰堂を一見したいと考えていたからである。そのような目的で平等院を訪れたが、鳳翔館内に展示されていた菩薩に心を奪われた。鳳翔館内に展示されていたのは雲中供養菩薩像というもので、楽器を持ちながら浮遊している菩薩像である。その菩薩達は、琴や太鼓、笙など音楽の授業で習うような日本古来の楽器を持ちながら浮遊している。実際の楽器の写真と照らし合わせながら菩薩を見比べると、再現度の高さに感動した。だが、時間の関係によって急ぎ足で回ったためすべての雲中供養菩薩が持つ楽器を確認することはできなかった。また拝見しに行こうと思わせるほど見応えのある施設であった。

そして、同じく2日目に伏見稲荷大社を訪れた。かねてから伏見稲荷大社に訪れたいと考えていた。なぜなら、私はキツネが大好きであり、キツネの名所の一つと言えば伏見稲荷大社であると考えたからである。当初は頂上まで登りたいと考えていたが、日が暮れ始めており、足も限界を迎えていたため、途中で帰路についた。登っている間、何体ものキツネと出会え、幸せな気持ちになった。また、思っていた以上に鳥居があり今でも奉納されているということを初めて知った。降りるときには街灯がともっており、薄暗い中での鳥居も怪しげな雰囲気があり風情があると感じた。伏見稲荷大社を訪れてよかったと感じたが、お参りをしなかったため、登っている途中であっても拝めばよかったと少し後悔した。

続いて、研修3日目に嵐山を訪れた。嵐山に行きたかった理由は二つある。一つは、嵯峨嵐山文華館で百人一首に関する展示を見たかったからである。もう一つは、竹林の道を歩きたいと考えたからである。まず、嵯峨嵐山文華館へ足を運んだ。小学生のときに下の句の百人一首を学校の授業で習っていたため、百人一首について興味・関心を抱いていた。その百人一首の展示の中で特に記憶に残っているのは歌人のフィギュアである。百人一首の歌とその歌を詠んだ歌人のフィギュアが百体分並んでいた。私自身、歌は下の句のみであるがすべて覚えていた。しかし、歌人までは覚えていなかったため、「この歌は女性か読んでいたのか」などと感じ勉強になった。そして、二階には主に絵画の展示があった。近代の絵画もあり、百人一首の展示とのギャップを感じた。嵯峨嵐山文華館を訪れた後、竹林の道へ足を進めた。高校時代にも嵐山を訪れたが、調査不足により竹林の道を歩くこ

とができなかった。同級生が竹林の道を歩いたと話していたのを聞き、「また行く機会があれば絶対に見に行きたい」と感じていた。その機会が訪れたため、竹林の道を歩くことを提案した。竹林の道までの道のりが思いのほか遠く感じた。そして、竹林の道が近づいたとき、まだ竹林の道にたどり着いたわけではないが、カメラのシャッターを切っていた。早とちりをしてしまったが、ついに竹林の道にたどり着いた。中に入った瞬間、観光客の多さに驚き戸惑った。しかし、その戸惑いの気持ちは竹林の壮大さにかき消された。想像していた以上の竹の凄みにとても感激した。月並みな感想だが訪れてよかったととても感じた。

そして、研修4日目に養源院を訪れた。養源院は淀君が秀吉に頼み建立したものである。ここに訪れたかった理由は血天井を見たかったからである。養源院ではガイドさんから俵屋宗達の絵や血天井などの説明を受けた。血天井には掌の跡もはっきりと残っており、100年以上も前のものが現存していることに衝撃を受けた。また、廊下の軋む感覚が心地よかった。

次に、研修5日目に二条城を訪れた。二条城は徳川家康の命によって建てられた城である。残念ながら、本丸の中に入ることはできなかったが、五分咲きの梅の花を見ることはできた。そして、京都に来たら絶対に食したいと思っていた、抹茶と茶菓子をいただくことができた。本場の抹茶は苦みが強いと感じたが茶菓子との相性は抜群であった。お菓子をいただき満足したのちに、目に入ったのは清流園と呼ばれる美しい庭園であった。水のある風景は心が落ち着くなと改めて感じた。

また、同じく5日目に八木邸を訪れた。ここは新撰組の屯所であった場所であるとガイドさんから説明を受けた。私は新撰組についてあまり詳しくはわからず、新撰組の中でも2グループに分かれていた時代があったということもその日に知った。八木邸の中には刀傷の跡や当時から置いてある子ども用の机などがあり、事件が起こった当時の凄惨さを感じることができた。そして、八木邸のガイドを受けてからその日2回目のお茶をいただいた。八木邸の隣ではお菓子屋さんが営まれているため、八木邸への入場と一緒にお茶をいただくことができた。二条城でいただいた抹茶よりも甘みを感じられた。1日に2度も抹茶をいただけるとは思わず、とても幸せな気持ちになった。

最後に、日本文化特別演習に参加し、改めて京都の魅力を感じることができた。京都といえど寺社であると考えていたため北野天満宮や平安神宮などの神社を訪れることができてよかったと感じた。家族の分のお守りは買うことができたが、自分のお守りを買い忘れてしまった。買い物リストを作ればよかったと後悔をした。また、平等院内の鳳翔館や京都国立博物館などで展示品を見ることに長い時間をかけてしまったため、時間配分の計画も細かくたてておけばよかったと感じた。だが、目的地へはスムーズに行くことができ、京都の歴史を感じられる体験がたくさんできたため満足した。この演習に誘ってくれた友人にはとても感謝している。そして、参加しようか迷っている方はぜひ参加することをおすすめする。

中世・近代の遺物、痕跡巡り

2部日本文化学科 2年 2817133 永倉 拓輝

私は主にこのタイトルを中心、目的として今回の研修旅行に参加した。また、私は奈良と京都に行った。そして、旅というのは計画的に上手くいかないことや、だらだらと一日を過ごしてしまうことがある。私はそれになってしまったのだ。来季この行事に参加する人はおそらく報告書を受け取るのであろう。ここで失敗談を論じながらこのテーマを論じていくことは、第三者（次回参加する人）からみれば単なる言い訳でしかないと思われるかもしれない。しかし、来季この行事に参加する人には私のようになって欲しくないのである。そのため、少し文章が雑になってしまうのだが失敗談も交えながら、私が個人研修で訪れたところの経路について論じていきたいと思う。

私は3日目（個人研修1日目）に奈良を訪れた。奈良駅までに行く道としては、ホテルから今出川駅まで歩き地下鉄烏丸線に乗り京都駅で降りた。そこからJRに乗り奈良駅に到着したのである。京都駅から奈良駅まではおよそ1時間10分ぐらいであった。だが、私の乗った電車は各駅停車であるため、快速や特急に乗ればもう少し早く奈良に行くことが出来るのかもしれない。そして、私は駅から歩いて奈良公園に行き、そこで鹿の写真を撮った。その後商店街で昼食を済ませて京都へ戻った。京都駅から地下鉄烏丸線で今出川駅へと向かった。その後天気が良好だったため、京都御苑を散歩することにした。今出川駅の近くにある門から御苑の中に入って一周するのではなく、右側沿いに進んでいったのである。すると途中にベンチがあってその周囲には梅などの植物が咲いていた。それは美しかったのだが、中には去年の台風の影響からか枝が折れていたものもあった。それを見たことによって、災害の残酷さを考えさせられた。そうして私は京都御苑からホテルへと徒歩で戻ったのである。

私は4日目（個人研修2日目）に京都市内を歩いて新選組のゆかりの場所を色々と回ろうとしたのであるが、天候は雨だったため、万が一雨によって風邪をひいてしまった場合は明日に支障が出てしまう可能性があるだろうと考えた。そのため、ホテルの近場で食べ歩きに変更した。これに変更したことで私の失敗を生み出してしまったと言える。ホテルを出発したあと堀川通に商店街があるのでそこに向かうことにした。その道中には晴明神社という神社があった。晴明神社とは安倍晴明で有名な神社である。そこでおみくじがあったので、それを引いた。結果は中吉である。私はその結果になぜか気分が良くなった。それからまんまん堂というお店に行きそこでカレーライスを食べ、その後鴨ドーナツというお店でシナモンドーナツとカフェオレを食べた。この時点でお腹いっぱいになってしまったのである。さらに急にお腹の調子が悪くなってしまったのである。仕方がないので、ホテルに帰ったのである。ホテルに帰宅した時間が11時40分ぐらいであった。その後私は一人ホテルの部屋でぐうたらと携帯電話をいじりながら、寝るまで過ごしていたのであった。

だらだらと過ごしている間に帰宅時間の最速記録を出した妙な嬉しさと内容の薄すぎる1日に対する後悔それらが脳裏をよぎって、この日のホテルの部屋の中ではそれ以外他に何も考えることが出来なくなってしまったのだ。私の胃袋の大きさを過信しすぎたゆえに食べ歩きは失敗に終わってしまったのであった。

個人研修3日目（最終日）は今出川駅から地下鉄で四条駅まで乗り、そこから歩いて祇園を通過して八坂神社へと向かった。八坂神社の奥には円山公園という公園がありそこには私が歴史上の人物で尊敬している坂本龍馬・中岡慎太郎像がある。そこで写真を撮った後私はねね通りを歩いた。ねねという人物は豊臣秀吉の正室である。その通りにある高台寺へと向かった。高台寺に行くには台所坂という石段の階段を上っていく必要がある。そして、受付で入場券を買った。ねねが埋葬されているところは霊屋にある。霊屋に行く途中にある方丈という建物があり、その前庭の景色は素晴らしいものだった。私は高台寺の石段をゆっくりと下った後に、高台寺からは少し後ろ戻ったところにある掌美術館へ行った。この美術館は秀吉とねねだけの関係や簡単な説明だけではなく、関ヶ原の戦いで石田三成を裏切った小早川秀秋の簡単な説明やねねの実家が木下家であるので、木下家と秀吉の家系図などがあった。また、当時使われていた道具などもこの美術館に保存されている。さらに、木下家と豊臣家の年表などがあるため木下家の活躍を年表から学ぶことができる。30分ぐらい美術館を鑑賞した後私は美術館を出てからねね通りを真っ直ぐ歩いた。そして、大きい通りに出た後私の右手には傾斜が異様に高い坂があった。その途中に維新の道と書かれている碑がある。険しい坂を上って行くと京都霊山護国神社があり、その中に坂本龍馬・中岡慎太郎の墓や幕末に活躍した人の墓がある。そこで個人的に面白かったのが、受付の人に入場料を払って中に入るのが一般的だと思われるが、そこではゲートにお金を入れるところがあるのでそこにお金を入れると入場することが出来るのである。ゲートを通り過ぎた後階段を上って行くと猿に注意という紙が貼っていたので、ドキドキしながら坂本龍馬・中岡慎太郎の墓までたどり着いて参拝した。参拝した後行きとは逆のルートでホテルに帰ったのである。

全体を通して学んだことは当たり前のことなのかもしれないが、ガイドマップで見た写真や絵よりも現地に行って直接自分の目で確かめることによって、ガイドマップでは書かれていないところや異なる側面でもものを見ることが出来るということを学んだ。また、急な計画変更と自分の過信が失敗に繋がってしまうのだということを今回の旅行で学んだのであった。

5泊6日の京都の思い出

2部日本文化学科 2年 2817138 寶金 あみ

2月26日 団体研修を終えた後、同じ班の2人と別れ私は独り藤森神社へ向かった。藤森神社といえば勝運、学問、馬の神社である。実家が競走馬を飼育しているわけでもない私がこの神社へ向かった理由は、現在では皇室の私有財産となっている鶴丸国永という日本刀が、昔、藤森神社にあったからである。言わばオタクの聖地巡礼だ。参拝の後、境内を見て回り御朱印をいただいた。歩き疲れたこともあり少し休憩をしていると、目の前に宝物殿が見えたため入ってみることにした。中には様々な馬の置物や鎧や武器などがあった。中でも、国宝に指定されている三日月宗近の写しが展示されていたのには驚いた。奉納された刀剣乱舞の鶴丸国永のグッズもたくさんあった。同じ班の2人とは、この後に伏見稲荷大社で合流する予定だったため徒歩で向かうことにした。私が通った道はちゃんとした歩道もなく、自転車の通りも多かったため轢かれるのではないかと恐ろしかった。

2月27日 私たちは建勲神社へ向かった。この神社は織田信長公を祀っており、「敦盛」の一節が刻まれた石碑があった。ここへは、織田信長公が所有していた薬研藤四郎、宗三左文字にゆかりがあるため訪れた。宗三左文字は建勲神社所有の重要文化財である。ここでも参拝の後、御朱印をいただいた。刀剣乱舞のグッズもたくさん奉納されており、公式の絵師の方が描いた色紙も奉納されていて見るのが楽しかった。次に向かったのは北野天満宮だ。ここへは、代々源氏の家系に渡り酒吞童子を切ったとされる重要文化財の鬼切丸、別名髭切を見にやってきた。何時間でも見ていられるくらい宝物殿は居心地がよかった。梅もきれいに咲いており、とてもいい気分になった。次に嵯峨嵐山文華館へ向かった。百人一首をやっていたことのある私にとっては天国のような空間であった。そこの2階では塗り絵の企画がされており、ご自由にどうぞと書かれていたため3人で塗り絵をした。水彩色鉛筆を使用したのは初めてだったがなかなか上手く塗れたので満足だった。その後、竹林の道を通り野宮神社へ向かった。いい人ができるようにと参拝し、おみくじとお守りを購入した。

2月28日 この日は平安神宮へ参拝後、2人と行動を別にし、私は栗田神社へ向かった。ここへは一期一振、三日月宗近にゆかりがあるため訪れた。境内には鍛冶神社があり、ここは鍛冶職人の栗田口吉光、三条宗近が祀られている。両社を参拝し、御朱印をいただいた。当初の予定ではこの後、養源院で2人と合流だったのだがお土産を買うために私も清水寺へ向かった。坂道が本当に苦しかったが気合で乗り切った。ハッ橋のお店で食べたソフトクリームが美味しかった。次に養源院へ行き、血天井を見た。話を聞いたときに私が抱いていたイメージは、暗めの板に乾いて黒くなった血の跡が残っていて、血の跡と言われればそう見えるが、単に板の木目のようにも見える。という程度だと思っていたためそこまで期待はしていなかったのだが、ここが頭でここが足、ここが腕で…と説明され、びっ

くりするほど人のかたちがそのまま残っていた。手形などはホラー映画でみるものとそっくりだった。次は豊国神社へ向かった。この神社は豊臣秀吉公を祀っており、重要文化財の骨喰藤四郎がある。ここでも参拝後、御朱印をいただいた。その後、京都国立博物館へ行き、1階から順番に見て回った。京都国立博物館は東京国立博物館と違い、館内での写真撮影は一切禁止だった。仏像が展示されているところを見た、目がキラキラと光っている仏像に驚いた。

3月1日 この日は俳優の佐々木蔵之介さんの実家である佐々木酒造へ行き両親へのお土産を購入した。私はお酒を飲みはするがなにが美味しいお酒かわからないためネームバリューでゴリ押し作戦である。その後、二条城へ行きパンフレットに記載されている撮影スポットで写真を撮った。次に、御所を順路に従い見て回り蛤御門に残る銃弾の痕を見た後、八木邸へ行き新撰組についての説明を受けた。知らなかったこともたくさん聞けたし、梁についた刀傷や芹沢鴨が躓いた文机なども見せてもらった。その後、酢屋を見て池田屋で夜ご飯を食べた。

この研修での私の当初の目的は百人一首などの和歌に関連した場所を巡るということだったが、いろいろ調べていくうちに京都刀剣御朱印巡りというものをやっていることを知り、そっちが目的になった。私は最初にオタクの聖地巡礼と言ったが、この京都刀剣御朱印巡りというのは、刀剣にゆかりのある京都の神社を巡るというものなのである。私は日本刀オタクというわけではなく、刀剣乱舞というゲームのオタクである。このゲームに出てくる刀剣たちに由来のある神社であったため、京都刀剣御朱印巡りをやろうと思った次第である。スタンプラリーのように思う人もいるかもしれないが、決してそのような気持ちで巡っていたわけではない。例えるなら、したことはないが、恋人の実家に挨拶に行くような心持ちで私は四社を巡った。御朱印はその場所に参拝したという証明である。京都だけでなく他の地域にも刀剣にゆかりのある神社があるのでいつか参拝したいと考えている。嵯峨嵐山文華館では百人一首の歴史を見ることができた。競技かるたのルールを解説している動画も流れており、また百人一首をやりたくなった。1階を一巡したら帰るつもりだったが、館内のお姉さんに言われ、せっかくだからと行った2階で塗り絵ができたのでお姉さんにはとても感謝している。私は部屋の中でできる遊びは大抵好きなので、当然色塗りも好きである。水彩色鉛筆を使うのは初めてであったが絵具と同じ要領であるということを知っていたため、絵具を使って絵を描くことが苦手で模写ばかりしていた私が、自分の中のイメージを表現できるか不安であった。しかし、イメージをしっかりと表現できたので大満足であった。同じ班の2人付き合わせてしまって申し訳なかったなど今でも思う。とても残念だったのは、渡月橋が工事か何かをしていて写真撮影をするにもショベルカーが邪魔だったことである。

京都の商店街の考察及び大阪と京都の百貨店比較 ～商業立地～

2部英米文化学科 2年 3017124 橋本 航太

私は、ある授業で商業立地の授業を受け、それがきっかけで、京都の商業立地等を稚拙ながら分析してみたいと思い、商業施設等を回り、2種類ほど調査をすることにした。1つ目は商店街の探索で、店の並び方や付近の立地など、それぞれに共通することがないかを確認し、札幌との違いを考察すること。もう1つは、京都の百貨店をいくつか回り、大阪の百貨店と比較してみる、というものである。

具体的な調査対象は、1日目の調査で出町榊形商店街、寺町京極商店街、新京極商店街、北大路商店街、河原町商店街、これら五つの商店街。2日目以降の調査では、京都の河原町商店街にある丸井百貨店、その付近にある高島屋百貨店、大阪、梅田にある大丸百貨店、京都駅の付近にある京都アバンティの四種類のデパートを調査した。

まずは商店街それぞれの特徴を軽く挙げていく。出町榊形商店街は基本的に八百屋、魚屋、スーパーなど、地元の方向きの食料品店が多い印象を受けた。北大路商店街は基本的に専門店が目立ち、革製品店、花屋、カフェ、洋服店などが目立っていた。寺町京極商店街、新京極商店街、河原町商店街の3つの位置関係は平行関係にあり、河原町と寺町京極の間に新京極がある、というものである。寺町京極商店街は、若者向けの洋服店が多く立ち並び、ファッションに重点が置いてあるようにも感じた。これに対して新京極商店街は、洋服店の他にも飲食店、土産物屋などが多く見られた。おそらくこれは、最寄りの駅に新京極の方が距離が近く、観光客が真っ先に辿り着くからなのでは無かろうかと考察する。実際、駅にさらに近い河原町商店街は、飲食店、手軽な生活品を買える薬局などが多い印象である。さて、ここまででそれぞれの商店街の特徴をまとめてきたが、ここで全てに共通して見えた特徴を紹介する。それぞれの商店街の出発点または中間地点に、銀行が確認出来たことである。出町榊形の近くには京都銀行、北大路商店街付近には滋賀銀行、中央信用金庫があり、河原町、新京極、京極寺町の付近、河原町駅にてみずほ銀行、三井住友銀行を視認できた。商店街に銀行が直接繋がっていたり、付近にあるのは札幌の狸小路商店街には見られない特徴である。ここから先は考察だが、おそらく商店街で買い物をする際に立ち寄って利用するためと推察している。

次に、2日目からの百貨店探索の内容をまとめたいと思う。どれも基本的に駅の近くに見られた。これは札幌の百貨店と同じである。都市部の駅の近くに配置することで、求めている客層を集めているのだろうと考える。百貨店に関しては、今回はそこまで大きな違いは確認出来ず、京都、大阪、札幌と大差が直ぐにはわからない、と言った結果になった。とはいえ、必ず地域性というものは出てくるはずだと考える。今後、詳しい考察をし、細かく検証していきたい。

参考資料 京都アバンティ、大丸京都店、高島屋、丸井大阪店フロアガイド

平成30年度 日本文化特別演習報告書 第8号

発行日 平成31年3月20日

発 行 北海学園大学人文学部

印 刷 株式会社アイワード

—— 文化を学ぶ 世界と繋がる ——

 **北海学園大学人文学部**